
猫又のサクラ りめいく！

尾ノ坂 駿介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫又のサクラ りめいく！

【Nコード】

N03930

【作者名】

尾ノ坂 駿介

【あらすじ】

たくさんの愛情が交差されて、たくさんの想いが絡まり合っ、この大きな桜の木の下で。

俺はまた一つ知る。人を好きになるとは、愛する事とはどういう事なのか。

追い求めていた存在がとてつもなく小さく、少し力を入れただけで壊れてしまうようなものだった時、人はどれほど頑張る事が出来

るのか。

もどかしくて、辛くて、泣きそうになっても。目の前の訪れた困難に打ち負けそうになっても。

それでも俺は、大切な人の傍にいたいから、前に進むんだ。

嘆きと悲しみが巣食うこの世界で俺が見つけたものは——彼女と言う、たった一つの光だった。

——猫又のサクラ、長い時間をかけてリメイクとして生まれ変わる。

はじめに。

お久しぶりです。尾ノ坂です。

この作品は数年前に完結した「猫又のサクラ」をリメイクした内容となっております。

リメイクとは言えど、描写や内容が大幅に改善・修正され、物語の展開も以前の「猫又のサクラ」と異なる箇所が多数見受けられます。リメイク前と同じシナリオがあれば、今作から新規に参入したエピソードなども多数収録しております。なので今作から読み始めた読者様も、前作を知っている読者様も楽しめるような内容設定を致しております。

前作で伝えられなかった箇所や新キャラクター、新エピソードを盛り込んで復活した「猫又のサクラ りめいく!」。楽しんで読んでいただけると幸いです。文才も無く未熟で要領の悪い人間ではありますが、これからも皆様に受け入れられるような作品を作っていくように頑張っていきたいです。

それでは長くなりました。

次から物語をお楽しみください。

2010年9月29日

尾ノ坂 駿介

第一章 彼女の名はサクラ

この桜の舞う中で俺は、こいつと出会った。

入学式の帰り道。桜吹雪が静かに舞うこの道は、温かく、それでいて優しい空気が包み込んでいた。俺の名前は藤咲啓太^{ふじさきけいた}。今年高校を卒業した大学の一年生。運動が得意だけど勉強が苦手なごく普通の学生だ。

俺の住んでいる町、桜ヶ丘市^{さくらがおか}はその名前の通り何処を見ても桜が綺麗に咲いている温暖の地域で、近くには年中賑わいを見せている商店街や人があふれ出る駅前などがあり、比較的都会と言ってもよい場所でもあるが、それでも市内から少し外れば田畑を耕す人の姿をちらほら見れたり、緑が一面に溢れる自然もたくさん見れる場所でもある。

自然と共有しながら、この桜ヶ丘という町が形成されている。そんなだから、俺にとっちゃ理想的な場所だ。人ごみや慌しい喧騒に苛まれずに毎日を送る事が出来る、本当に過ごしやすい場所だ。

空を見上げれば、風に乗った桜の花びらがふわりふわりと何処かへ飛んでいく。雑踏の中で人々に踏まれていく花びらもあれば、道沿いの川に落ちてふわふわと流れていく花びらもあった。まるで花びらが水浴びをしているように見えて、思わず笑みがこぼれた。

「あの木からたくさんの花びらが離れてんのかなー……ん？」

タンポポの胞子のように桜の木からふわふわと飛んでいく様を見詰めて、ふと気付いた。なにやら、桜の木の下でもぞもぞと動いている物体が見えたからだ。

はて？

生き物……だろうか。ここからじゃちょっと見えないな。

そばに行って確認してみるか。ちよつと興味あるし。

駆け寄ってみると、その大きな桜の木に圧倒されそうになった。

樹齡何百年になるのだろうか。改めて見ると、とても大きい。けれど、俺はこの桜の木を見覚えがある。つい先ほどと言ってもいいくらいだ。だって俺は、この桜の木で――。

「……いや。今はそんな事はどうでもいいか。それよりも……」

たくさん下に落ちている桜の花びらを手で払いのけて、もそもそと動く『それ』を俺は見た。

「これは……」

「……みゃあ」

そこには、生まれたばかりのような小さな仔猫がいた。薄汚れて茶になった銀のシルバータビーに、たくさんの花びらが纏わりついている。仔猫はじつと俺を見詰めると、逃げようとせずにぺロぺロと舌を出して桜まみれの身体を拭きだした。何だかその仕草が可愛かったので、身体の桜を取ってやると同時に、頭を優しく撫でてやった。

うにゃー、と可愛らしい声で鳴くと、仔猫は甘えるような仕草で俺に擦り寄ってきた。足首にもふもふとした毛が触れてくすぐったい。雌なのだろうか。それにしても人懐っこい。普通は逃げると思っただけ。

もふもふもふもつふ、と三、四回くらい撫でてやって、俺はすつとその仔猫から離れて背を向けた。そろそろ帰らなきゃ。もう直ぐお昼時だし。

それにしても、やっぱり猫って可愛い。いつもはツンツンしているくせに、時々甘えてくるツンデレはもちろんのこと、いつでもデレデレして付きまとってくる仔猫の、あのつぶらな瞳が男心をキュンとさせて……ごめん、なんかキモいな、壁に手を当てて反省。

「みゃーん……」

ふと足元から鳴き声が聞こえた。見ると、そこには再び身体を摺り寄せてくるさっきの仔猫の姿があった。

ありゃ。と一言声を漏らすと、俺はその仔猫を持ち上げて、近くのベンチに腰を下ろした。

膝の上に、仔猫を乗せて。

「……一緒にいても飯なんてないぜ？ 貧乏だし、それに部屋が汚いからね」

「みゃー」

……と言つても、通じるわけがないか。立ち上がつて、人の頬を舐め続ける仔猫に何を言つても——ヤベ、くすぐつたい。めっちゃくすぐつたい。ザラザラしてるけどそれが逆になんかくすぐつたい。「わぶつ……ちょ、頬はくすぐつたいから舐めるな……」って鼻の頭はダメだもつとヤバ……！……ふえ、ふえ、ふえつくしよい！！」

盛大なくしゃみが放たれる。もふもふした毛が鼻に入つて、ついやってしまった。顔は寸前に背けていたので直撃は免れたものの、仔猫はすんごく驚いたのか、口をぽかんと開けて、目を白黒させながら俺を見詰めている。しかし、直ぐに我に返つてごろごろと喉を鳴らして甘えてきた。

アハハッ、本当に可愛いな。

「……一晩だけなら、俺のアパートにいさせてやるか。一晩だけなら」

その内恋しくなつて本当に飼い出してしまうかもしれないけど、それもいいかもしれない。でも、今は一晩だけ、にしておこう。首輪はないけど、もしかしたら誰かの猫かもしれないし。あんまり愛着を沸かせると、手放す時に寂しくなるからな。一晩だけだけど、名前くらいはつけてやるか。そうだな……この桜の木の下で拾ったんだから、『サクラ』ってつけようか。うん、そのまんまだけどいいや。ネーミングセンスなんてタイムカプセルと共に埋めときました。

「うん、決定。とりあえずよろしくな。サクラ」

よつと立ち上がって、俺は仔猫——サクラを抱き上げて歩き出す。さて、帰ろう。……あ、どうせならミルクでもペットシヨップで買って帰ろうかな。うん、そうしよう。それから汚れてるからブラシとかも買って——。

この桜の舞う中で俺は、こいつと出会った。

「みゃん」

そう、一匹の仔猫に。

「……んっ」

カーテンの隙間から眩しいくらいの日差しが差し込んでくる朝の一日。その隙間から垣間見せている世界を一瞥すれば天気は上々だっということが良く分かる。外はスカイブルーに満ちた綺麗な空が一面に広がっていた。よつこらせと言いながら、俺は身体を起こそうと試みる。が、何故か起き上がれなかった。何ていうか、すっと起き上がれなかった。

……何だか、お腹辺りにどーも違和感を感じて仕方が無い。ぶっちゃけて言っと、重い。ただひたすらに、重い。ちよつと寝苦しかったのはこれのせいだろうか。

金縛りかな。しかし、目は開いているし、手や足は普通に動かせる。じゃあ一体何なのだろう。不思議に思っただけ俺は、かけていた布

団をめくり上げた。

.....
.....
.....

あ、ありのままに今起こった話を話すぜ！俺は仔猫を拾ってお腹の上で寝かせていたら、いつの間にか猫じゃなくそこには全然知らない女性が裸で寝ていたんだ。

な、何を言ってるかわからねーと思うが、俺も何が起きてるのかさっぱり分からないんだ。夢とか妄想だとかそんなチャチなもんじや断じてねえ。つまり結論は、

「うぉあああああああああッハッハアアアア！？」
もう叫ぶしかねえんだよバカタレが。この柔らかい感触をお前は夢だと申すのか？俺はトチ狂った覚えなんざねえぞ。

俺の絶叫が思いのほか響いたのか、俺の上で丸まって寝ていた女性性は肩を跳ね上げて飛び起きた。んで俺にしがみついた。

..... ってウボアアア柔らかい球体が俺のお腹にいいいい！？

ちよっと待て、女落ち着け！俺も今の状況を理解するのに精一杯なんだ！これ以上無駄に攻撃しないで！俺のライフはもう0よ！？

「ちょ、こら、離せ！当たってたんだよ！今しがみ付かれると後ほどからヤバくなるから離せ——って聞いてんのかてめえコラー！
！」

「おおお落ち着けるはずがありませんじゃないですかマジで！いきなり絶叫が耳元にダイレクトアタックですよ！？落ち着ける方がおかしいと思いますよ！」

「なら落ち着かなくていいから離せ！ アンタ今の格好見てみるよ
オイ、絶対冷静になるから——って、え？」

わーわー騒ぐその女を見て、俺は次の言葉が出せなかった。その
長い黒髪に、その喋り方。極めてその顔は……。

尚も俺の上で暴れる女を引き離し、女の肩に手を置いて、じつと
見詰める。女も俺の変わりように落ち着きを取り戻したのか、きよ
とした様子で、同じように俺を見詰めた。整った顔立ちに、お
っとりとしているが凜とした眉毛、細く艶やかに光る黒髪。

……似すぎている。何もかもが、似過ぎている。

「……………」

「……………」

……けれど、分からない。——本当にコイツは『アイツ』なのか？
でも、アイツはもう——だし、それなら俺の事だって覚えてるは
ずだし、何より——。

……………。

一応、確かめるために、俺は視線をちらりと下げて、女の顔から
少し下を見た。もう一度言う。確かめるためだから決していやらし
い思いがあるわけではない。決していやらしい思いでおっぱいを見
ようなんぞいう破廉恥な感情なんて持ち合わせてない。断じて。

細目で見ると、そこには『デーン！』と効果音が出るくらいの
豊満な、艶々に光る生乳があつた。っていうか牛乳があつた。それ
を見て俺は確信した。

……ああ、やっぱり違う。顔や声は似てるけど、アイツこんなに
胸でっかくねえ。普通より大きいけど、これみたいに大きくはね……

……え……………？

ばしゅっ！

その豊満なそれをガン見してたせいか、鼻から赤い液体が吹き出た。あわててそれから視線をそらしてティッシュで鼻を拭く。

つかしーな、鼻のボタボタとまんねえ。心臓のドキドキとまんねえ。何この朝。超刺激的なんですけど。ヤバ、超ウケルんですけど。うふふ、マジウケる。

ていうかガン見した俺が言う台詞じゃねえけど、少しは隠そうとしろや。おのれは恥じらいがないんか。

「……えーっと、その、話に移っても大丈夫ですか？」

「しばし待たれよ女人。……ふう、落ち着いた。とりあえず何か服を着てくれ。話はそれからだ」

「だか断る。昨日までこのカッコでいたんだから、今となって恥ずかしくはないでしょう？」

「いやいや。お前はそれでいいかもしれんけどな、俺が恥ずかしいんだよ。その辺のタンスに衣服があるからそれを……」

「人類みな最初は裸ですよ」

「聞いちゃいねえ。それどころか俺にニヤニヤしながら迫ってきてやる。そんなふしだらなカッコで。」

「新手の宗教勧誘ですかコレ？ もう誰か助けて。凄く助けて。お兄さん理性保てそうにないから。こんなやらしい人に迫られて拒否とか出来ませんから。」

ん……昨日、だって？

「なあ、アンタ。昨日って、何だ？」

「昨日？ 昨日は昨日じゃないですかー。明日でも明後日でもないですよー」

「いや、そりゃ誰だつて分かるよ。俺が言いたいのさ、アンタが昨日までそのカツコでとか言い出すから……」

「……覚えてないんですか？ 昨日オフロに入れてくれて、いっぱい身体を洗ってくれたじゃありませんか。あんなに身体をまさぐって……火照る身体を必死に抑えてたんですから……ぽっ」

……ホワッ？

「それから、オフロから出た後は私を優しく抱き寄せて、布団に入れてくれましたよね。ふかふかで気持ちのよい布団と、あなたのぬくもりが気持ちよかったです。素でイキかけました」

「え……ちょ……え？」

どういうことだ？

昨日、だよな昨日。昨日って確か、大学から帰って、普通にゴロゴロして、拾ってきた仔猫とじゃれて……。

あ、そういえば……。

「そうだ、サクラ。サクラはどこに行ったんだ？ あ、サクラってのは昨日拾った小さな猫だよ。……まだ顔を見せていないけれど、一体何処に行ったんだろう」

「ここにいますよ」

ここにいる——そう彼女が言ったので、俺はベッドの周囲をくまなく探してみた。

しかし、サクラらしき仔猫の姿は何処にも見えない。向こうの部屋にいろのだろうか。

「……どこに？ いないじゃないか」

「だから、ここにいますよ？ こ・こ」

ニコニコと笑って、自分の顔に指を差す彼女……って、は？

ちょっと待てよ。いやいや、本当にちょっと待って。これドッキリだろ。新手のドッキリで驚かせようっていう番組だろ。俺何度か

見たことあるぞ。

だってさ、コイツ自分でサクラだって言ったし、普通にありえないから、真面目にありえないから。

……あ、もしかしてサクラって演技役のサクラって意味？ ああなるほど。それならお兄さん納得だよ。

そろそろ『ドッキリ万歳！』って言いながらカメラ持ってきてピースする人たちがそろそろと……。

……。

……。

……。

………来ないんすけど？

「……んもう。まだ気がつかないんですか？ いいです、それなら私が教えてあげますよ……色々、ね」

ずっと迫ってきた彼女に気圧されつつ後ずさりする。が、未だに俺はベッドの中なので、直ぐに壁際まで追いやられてしまった。

や、やばいやばいこれはやばい。なんだか凄い危ない雰囲気なんですけど。裸の美女が迫ってくるとか普通にありえないんで、凄い怖いですけど。

そいつは這いずるように俺の身体と自分の身体をピッタリと密着させて、妖艶とも言えるような微笑を向けると、すらりと長い指を俺の顔にそっと触れさせる。そのまま俺の前に屈みこみ、まるで口説くかのように耳元で囁いた。

「私はですね。昨日あなたに拾われた仔猫——うっん、ちょっとした妖怪の『猫又』です。以後、ご見知りおきを……にゃ」

ふっ、と耳に息を吹きかけて、彼女——猫又は口から小さな八重

歯を出してニコツと笑う。

反面、俺はそれに脱力し、生気が吸い取られるような感覚に陥ったのであった。

「……と言っわけで、せっかく裸なんだからアッー！？ な営みを……」

「出てけええええええええええ！！！」

仔猫を拾ったと思ったのに、妖怪？ 猫又？ 何それ？

俺の平凡な日常は、この妖怪を拾った事で、とんだ非日常へと変わっていくんだとさ。

ああ、普通の日常カムバック。

第二章 猫又の歴史

「単刀直入に言う。もう俺のことは忘れていいから出てけ」

「単刀直入に言い返します。絶対に嫌です」

などというテーブル越しのお互いのやり取り。

何だか別れ話を持ち出した彼氏とそれを拒む彼女のような会話だが、別にそういう訳でもないのが今この頃。

あの珍騒動から一転、なんとか落ち着いて会話出来るところまで持ったこれだ。

……そ、それまでのあらずじなんか、口が裂けたって言えないもんね。

べ、別に変なことなんかちつともなかったんだから。

ちなみに今こいつは俺の服着ている。男物しかなかったので、仕方なく着せているのだが。

シャツと男用ズボンしか無いのがアウトだったな。これはどちらかといえば裸より刺激が強いかもしれない。

ぱつつんぱつつんに張った前シャツは今にもはだけそうで、その重そうな乳の体積に圧倒されている。

てか下乳出てるっす。マジパネエっす。刺激強すぎっす。

なるべく直視しないようにしよう。でないと命がいくらあっても足りそうにない。

「……さて、本題に入るうか」

「あつ、味噌汁お代わりです」

味噌汁を勝手に注いですすっていた猫又——サクラは器を俺に手渡した。

それに対し、黙って器に味噌汁を注ぐ俺……って何普通に対応してんだ？

つかお前、猫の癖に熱い味噌汁を飲むな。矛盾するだろが。

「……味噌汁飲んだら出てけよ」

「嫌です。私は味噌汁で捨てられるような安っぽい人間では有りません」

そりゃ捨てるもんなら捨てたいけどさ……。

ずるずると味噌汁をすする猫又を見て、俺はかの碇なんたらさんのように口元で手を重ね、尋問するように問う。

「……言い分聞こうか」

あくまで冷静に、相手のペースに飲まれないようにすること。それが詐欺商法にひつかからない第一歩。これは重要です。すると、猫又はゆっくりと、だがはつきり口を開いた。

「一発やらせて下さい」

……それ、何処のプロのスイーパー？

「却下」

「じゃあ二発で」

「増えてどうする」

「なら二分の一発」

「途中止めかそれ？」

「う……言い分聞けないじゃないですか！」

HAHAHA！

聞けるかバーロー。

「話を戻す……つまりお前は人間でも猫でもない、『猫又』って言う妖怪で、しかも何にでも姿を変えることの出来る……そこまで間違いはないな？」

「……はい」

短く返事をする。あの時——そう、俺が大学の入学式を終えた帰り、桜の木の下で拾った子猫、それがこいつということだ。

アメリカンショートヘアでシルバータビーの毛種。見かけは生まれて間もないくらいの大きさ。

ここまでならば別に対して普通の子猫と違いはないのだが……問題はその後。人間と同じ姿に変える事が出来るという点、だ。

とりあえず聞きたい事は沢山あるから、一応洗いざらいしゃべって

もらう。

捨てるのはその後だ。

「で、お前に聞きたいことがあるんだが……」

「スリーサイズですか？ えつとですね、上から八十九……あ、やつぱり見ます？ 見たい？ ……ふふふつ、仕方ないですね、そんなに言うなら……」

「いや、言っていないし、見たくない。何故服を脱ごうとする？ 意味不明だ。とりあえず捲るな、しまえ」

「酷い、自信あるのに……」

いきなりシャツの裾をめくり上げようとするが、俺の一喝でしぶしぶと元に戻す猫又……頼むからそろそろ自重してくれ。

目の前で服脱がれたら俺は鼻血どころじゃすまないから、マジで。

はい、冷静冷静深呼吸……よし、落ち着いた。

「……俺が聞きたいのは、姿を変えることについて、だ。何でも変えられるという事は、お前は男にでも、もしくは別の生物にでもなれるのか？」

「……いえ。何にでも、というのは語弊でしたね。猫又は何にでも姿が変えられるというわけではありません。ちよつと話は少し長くなりますが……」

そういつて、猫又は自分のいきさつについて話し始めた。

「猫又」と言う存在は、江戸時代後期から始まり、平成の世でもある現代にも続いている。その存在は、現在の日本各地だけで約一万余匹は居るとのことらしい。

だが、元々猫又は人間世界には存在していなく、別の世界——一般的に言えばパラレル・ワールドという空間を超えた別世界で暮らしていた。

そんな中、平穏に暮らしていた猫又の世界に突然「人間の世界」と「猫又の世界」を繋ぐ亀裂が生じてしまい、その亀裂から多くの猫又が人間界へ送り出される結果となった。

その亀裂が生まれた時代が、江戸時代後期。明治との政権交代を意味する幕末の世であった。その時代をきっかけに、猫又と人間との奇妙な関係が生まれてきた訳である。

それから、元の世界へ帰ることの出来ない猫又達は、人間と共に共存することを決意した。飼い猫として、時には人間に姿を変えて戦場へ戦いに挑み、時には人間の支えとなったのである。

だが、大多数の人間は猫又の存在も知っていないはずもなく、その存在自体が昭和の時代を越えてうやむやとなり始め、一九四五年の終戦の年から一転、猫又はすでに「人間」と「猫」と二つの存在として扱われるようになった。

もはや「猫又」という存在はなくなり、猫又は人間として生きていくか、猫として生きていくかという二つに分岐したのだった。もちろん、猫として人生を生きていく者もいれば、人間と同化して生きていく者もいた。それが原因なのかどうかは分からないが、この平

成の世で猫又を知っている輩は日本でもほんの一握りしかない。

動物の世界にでも同じように、猫又にも「雄」と「雌」が存在し、変化できるものにも種類は限られている。例えば、雄の猫又の場合、変化出来るものは「人間の男」と、「一般猫」、それから「擬人猫」にしか変化できない。逆に雌の猫又の場合も、変化可能なものは「人間の女」と、「一般猫」、「擬人猫」にだけしか変化できない。亀裂が生まれた当初の猫又達はそのほかの生き物に変化は可能だったのだが、現在に至っては其三つしか猫又は変化出来なくなっていた。

その理由は、今だ解明されていない。推測でいえば、「変化の練習」を怠っていたのが問題とされている。

「……と、言うのが今までの猫又の歴史で……って、啓太さん！聞いていますか！？」

……ん？ マサ子がサブ夫にメリケンサック食らわせてる話だっけ？ どうも内容が理解できなかった。だから寝てました。睡眠学習って大切だと僕は思います。

「……ああ、すまん。醤油はそっちだ」

「誰もんなこたあー聞いてません！ 全く、啓太さんが聞きたいっていうから……！」

「……聞けるよ。で、変化することは出来るけど、自分の異性以外やその他の動物には変化が出来ないんだろ？」

「あつ……ええ。そうです」

まさか本当に聞いているとは思っていなかったのか、猫又は少しだけ驚いた表情をした。

……まあ、俺こうみえて地獄耳だからね。是非今度は目を開けたまま寝るスキルを習得したいものだ。

「……大方話は分かったが、変化可能なものの中でよく分からないのが一つあったんだが……『擬人猫』って、一体なんだ？」

「擬人猫と言うのは、その名の通り、猫の姿をした人間…簡単に言えば猫の耳と尻尾その他諸々がある人間です」

「……ふーん。俗に言うアレか。アレなんだな。そつかアレか、あははははは……」

「あれって何ですか？」

「激しく気にすんな」

猫耳と尻尾のある人間で……普通に想像したら凄く萌えたんですけど。

しかしそれを言ったら絶対にこの猫又調子乗るだろうから言わない。絶対に言うもんか。

「さて、聞きたいことは聞き終えた。それじゃあ……」

「それじゃあ……って。もももしかして待ちに待ったアーツな展開ですか！？人間と猫という一線越えた禁断の愛ですか！？よっしゃ啓太さんならそう言ってくれると信じてました。さあ何をし

ますかベッドですか前座は一体」

「出てけ」

「ヤです！」

あまりの早口に前半は聞き取れなかった。

まあ聞き流して大丈夫だな。だってロクなことと言ってなさそうだな。

「はあ……昨日拾ってくれたときはあんなに優しくったのに……なんで今日はこんなに冷たくなって……ハッ!? まさかこれはいわゆるデレ時々ツンツンという昔から由緒ある照れ隠しというものは!? だとしたら昨日と今日の啓太さんの行動と発言に全て合点がいく! もう、ツンデレならツンデレと早く言ってくださいよ!」

なんか俺〓ツンデレという方式が勝手に立てられているが……べ、別にそんなんじゃないもん。

「ああ……それにしても昨日は凄かったです。どろどろの私の身体を、優しく綺麗にしてくれたときの啓太さんの表情……もう思い出すだけでハアハアもんですよハアハアハア……」

あー、あったね。そういうこと。もちろん猫の状態のときだが。

うん、今の状態で思い出したら顔面にメラ。ーマと言う名の火柱が上がったね。

おっと妄言妄言。てか怖いから思い出して悶えんなよ。

「身体の隅々まで綺麗にしてもらって、しかもあんなところまで……。そう、私はあの時から既に決めていたんです。もう私は啓太さ

んに身も心も捧げたも同然！ 死ぬ気で愛しています啓太さん！
だから一発やらせてください」

「結局目的はそれが変態猫。やらしてやらんし、鬱陶しい。さっさと出てけ」

「そつ、そんな……百万年と二千年前から愛してますよ啓太さん！」

うるせえなコイツ……無視しよ無視。

今日の晩飯でも考えてシカトしてよ。

「八千年過ぎた頃からもつと恋しくなりました！」

今日は晩飯何にしようかな。

久しぶりに魚のフライでも作ろうかな？

じゃあスーパーで鮎か何か魚買ってこないとな。サブは野菜サラダで決まりだ。

コールスローもスーパーで調達してこよう。

「一億と二千年あとも愛してますよ！」

そついや巨人勝ったかな？

最近阪神が強くなってきたからな。
負けて欲しくないぜ。

近頃ナイターも見てねえしなあ。

よし、今度巨人対阪神の試合を見に行こう！

そつと決まりやネットでチケットを購入しとこうか。

「あなたを知ったその日から私の地獄にエロスは絶えな」

「さっきからうつさいわ！」

あまりのウザさに、つい返答が出てしまった。おう、しつと！
大学から帰ったら、絶対に何処かへ捨ててきてやる。俺は密かにそう思ったのだった。

第三章 猫又のサクラと『彼女』

「……………ねえ、啓太さぁん……………」

無性に腹の立つような立たないような甘えた声で、猫又は玄関で靴を履いている俺を呼ぶ。

くるりと後ろを振り返ると、指を咥えてこっちを見詰める、欲求不満の団地妻みたいな猫又がいた。

演技か。演技だな。なんだかすっげえム力つく。甘えた感じがすっごいム力つくな。

「馴れ馴れしく呼ぶな猫又。俺が大学から帰ってくるまで絶対に外に出るんじゃないぞ」

そう言っただけで睨みつけてやると、当の本人は渋い顔でアホの子みたいに俺を見詰めてきた。本当にアホの子でも見るかのように。

「あぁん。そうじゃなくてえ、名前で呼んでくださいよぉ……………」

「名前？」

「ほら、啓太さんが最初に付けてくれた『サクラ』って名前。拾われてから全然名前で呼んでくれてないでしょう？　だ・か・ら、呼んでくださいよぉ……………」

にじりにじりと俺に接近してくる猫又の額に掌を当てて、ぐいっと押し返す。

うぎー、という猫又の苦しそうな声が聞こえてきたが気にしない。
無視の方向で。

しかしまあ……変なのに関わっちゃったな、俺。

猫を拾ったのかと思ったら実は猫又で、しかも雌で淫乱ときたもんだ。

雄だったらまだ意識しなくてもいいんだけど、誰がどう見ても人間の、しかも女の姿だしなあ。

猫又は名前を呼ばれるのを待ち望んでいるのか、キラキラと瞳を輝かせて俺の顔を覗き込んでいる。

その表情は純粹無垢で可愛いものだったけれど……絶対に下心入ってるね、絶対。性欲に対して純粹無垢だろうと思う。

「……やれやれ、分かったよ。それじゃ行つて来る」

盛大なため息をついて、俺は靴を履いて玄関を開ける。

そして去り際に手を少しあげて猫又に一言、

「ダーク猫マター」

と、それだけ言って、俺は扉を閉めた。

ドアの向こう側から何かドタバタとした喧騒とにやーにやーとか言う、うるせー泣き声が部屋を響いていたりするのだが……近所迷惑だし犬のおまわりさん連れて来いだ。

……うむ、やはり改めて思うがネーミングとギャグセンス皆無だな俺。

さて、今日も一日頑張ろうかな。

夕方に帰るつもりが、役員決めやら何やらが色々あって、遅くなつてしまった。

時間はもう午後七時。バラエティ番組を録画するの忘れてたな、くそつ。

「……ふう、やっと帰ってこれたよ」

「お帰りなさいあなた。私を夕飯にします？ お風呂で私とします？ それとも、わ・た・し？」

「初っ端から意味わかんねえ出迎え方すんな」

しかも選択肢全部一緒だし。舐めてんのかコラ。

長い黒髪をゴムかなんかでポニーテールに纏めた猫又——のサクラは、新妻のように玄関で正座して、ニコニコ顔でそこにいた。

いや、新妻つてもものでもないな。俺にとっちゃ押しかけ女房にしか見えないし……いや、女房でもねーな。押しかけストーカーだな。

うむ、決定。新妻みたいな押しかけストーカーだ。

「むー、せっかく女性経験が皆無そうな啓太さんをドキツとさせる出迎え方をしたのに……。……ああ、つまり『言葉はいらねえ身体で示せ』ってヤツですか。そうなんですか、そうですか。そんなエロスな啓太さんにこのムチムチボディを提供——」

女性経験が皆無——とか言われた辺りで少しカチンときた。

確かに経験は少ないかもしれないけど、『その顔』でそれを言われると、無性に腹が立ってきた。

……早く追い出そう。このままじゃ——いつかは彼女にキレちまう。

「……知るかよそんなこと。俺のこと何にもしらねー癖に、適当な事言ってんじゃねえ」

「何も知らないのなら、これから色々と知っていくまでです！ そりゃあもう啓太さんの秘密のチヨメチヨメをたくさん、色々、綿密に……うへへ」

……ダメだコイツ。ポジティブすぎるわ。

こんだけ俺が愛想悪く接してんのに、全然こたえてねえ。勝手に人の鞆を奪って『荷物片付けますね』とか言い出した時点で、もうコイツは此処に居座ることを決めているんだ。

俺は猫又から鞆を奪い返すと、左の親指を玄関にピツ、と向けた。それを見て猫又は不思議そうに首をかしげた。

「いらねえ事をすんな。それよりも……さつさと出てけ。ここは俺の部屋だ。お前の部屋じゃねえ」

「え、嘘。もう部屋のドアに付けるプレートを作っちゃいましたよ？ 『啓太さんとサクラの愛の部屋』って」

「今すぐ片付けろ。勝手な事するな」

「そ、そんな！ だって部屋以外にもベッドには『二人のラブソデイ』とかトイレには『緊急用』とか居間には『のんびりビング』とか色々作って——」

「いい加減にしろっ！—」

俺の怒声に猫又はビクツと肩を跳ね上げた。

本当ならばもつと冷静に物事を進めたかったけれど、我慢できなかった。

何で、勝手にそんなことをする？　こんな恋人みたいなコトをして、俺が喜ぶとも思ったか？

俺はそこまでバカな男じゃねえんだよ。猫又が——出会ったばかりの奴が、恋人の真似事なんかするんじゃない。

……その顔で、その言葉遣いで、恋人の真似なんかするんじゃない。いい加減腹が立つんだよ。

俺は無言で鞆の中から女性用の下着と服を一着ずつ取り出し、猫又に投げてやった。

猫又は慌ててキャッチすると、怯えたような顔で俺をじっと見詰めた。

俺はなるべく、猫又の顔を見ないように言ってやった。

「……ほら、一応服は買ってきてる。あと、お金も少し渡してやるから、これで食っていけ。……拾われたかったら、もう一度猫の姿に戻って、誰かに拾われな。それで猫の姿のまま過ごしていけばいい。猫又の世界から来たとか知らないけどな、ここは人間の世界だ。人間の姿をして、楽しんで食っていこうなんて考えは大間違いだからよ」

万札を三枚、財布から取り出すと、猫又の掌に置いてやった。

小さい。その小さな掌を『彼女』のそれと重ねて、胸が痛くなった。

——違う。コイツは『彼女』じゃないんだ。違うから——彼女と同じようなことをするコイツが、憎たらしく見えて仕方が無いんだ。

全てを分かっているように、全てを知っているように、同じような

ことをしてくるコイツが。

「……悪いけどな、俺はお前と一緒に居られない。……出て行ってくれ」

それ以上の言葉は無い。出て行って欲しい。これ以上、あの時のことを思い出させて欲しくない。

——でも、どうしてだろう。あの頃はまだ落ち着いていたのに、どうして今になって、こんなに動揺しているんだろう。

猫又は、何も言わずに荷物を持って玄関まで歩いていくと、一瞬だけちらりと俺の顔を見詰めて、そのままパタンとドアを閉めた。

彼女が部屋から出て行って、直ぐに静寂が訪れてきた。無音の世界。俺以外に誰一人存在しないような……そんな錯覚に見舞われる。

ふと、最後に見た彼女の顔を思い出して、とある感情が芽生えてきたが、首を数度横に振って、すぐさまその考えを否定した。

……いや。いいんだ、これで。彼女も本来なら俺に拾われるべきじゃないんだ。猫として……誰かに拾われていれば、それでいい。

俺は、ゆっくりとした動作で自室へと向かった。しかし……何故だか、その足取りは重たかった。

猫又が出て行ってから、どのくらい時間が経っただろう。

時間を確認してみたけれど、意外にも、それほど経ってはいなかった。数秒、数分が、やたらと長く感じてしまう。

明日までに提出する予定のレポートが捗らない。机に向かっても、頭に浮かび上がってくるのは、あの猫又の顔。ドアを出る前の――
悲しそうな表情。

「……くそっ」

ベキリ、とシャープペンの芯が折れてしまった。無意識に力を入れていたのか、折れた芯は回転するように跳ねて、机から地面へと落下していった。

……引つかる。何でか分からないけれど……凄く引つかる。心に鎖でも繋がられたような、嫌な気分だ。

どうして、どうして俺が、こんな嫌な気分にならなきゃいけないんだ。本当なら、追い出せて清々とした気分になれる筈だったのに。悩んでも、悩んでも、レポート用紙に文字を書き出す事が出来ない。集中が出来ない。落ち着く事が……出来ない。

そうしてまた力を入れて、シャープペンの芯が音を立てて折れてしまふ。さつきから……この繰り返しだ。そして、気がつけば換えの芯がもう無い。

そういえば、以前から買い溜めしようとしてたのを忘れていた。さつきのが最後だったのか。

「……仕方ない。コンビニでも行くか」

おぼつかない足で椅子から離れ、俺は玄関まで向かうとドアを開けて、外へと出た。

外はもう、真つ暗な世界へと変わっていた。

春の夜風は気持ちが良い。涼しく、そして何処か暖かい。気分を覆すとはではないが……それでも、幾分かは落ち着く事が出来た。しかし悠長にしている場合じゃない。まだ提出用のレポートは白紙のままだ。さっさと買って、さっさと戻ろう。

そう思っただけでコンビニまで駆け出そうとしたところで——ふと何かが目に映り、俺は足を止めた。

近くの公園の、子供が遊ぶような小さなブランコで、キコキコと鉄と鉄が交じり合うような音を奏でて座っている女性の姿がそこにあった。

「ぐず……ひぐつ……えぐつ……！」

——何度も顔を手で擦って泣いている、猫又の姿がそこにはあった。その姿を見て、俺は言葉を失った。彼女の涙を見て、息をすることも、動くことも忘れていた。

俺は……一体何をやっているんだろう。彼女が悲しそうに泣く姿が見たくて追い出したのか？

——違う。違う！俺は、こんな……こんな彼女が見たかったわけじゃない！

俺は馬鹿だ。たとえ行為や言動が似てようと、彼女は決して真似をしてるわけじゃなかったのに。

それなのに俺は、真似をしてるだ何だっけ勝手に決め付けて、一人で勝手に怒って、最終的には彼女を泣かせてしまった。拾うだけ拾って、最後には捨てる。悲しませて、文句を言って捨ててしまう。

……なんだよ俺。サイテーの飼主じゃねえか。個人的な理由をで

つち上げて、捨てるための口実を作って……最低の人間じゃねえか。たとえ彼女が人間ではなかつと、猫じゃなかつと、それでも、俺にも拾った責任はあるはずだ。飼い主としての……責任があるはずだ。

これじゃ……拾った動物をむやみに虐待したり、拾った癖に、可愛くないから、育てられないからと言って保健所に送ってしまう、最低の飼い主と一緒にじゃねえか。

俺は……奪ってしまったんだ。
折角彼女が見つけた居場所を……取り上げてしまったんだ。

「……サクラ……」

一步、足を踏み出して、なおも泣き続ける彼女を呼ぶ。それに気がつき、ふっと顔を上げて此方を見詰めてきた。

「けいた、さん……？」

しゃっくり混じりの声で俺の名前を呼んでくる。ぼろぼろと涙を零すサクラを見て、俺は次の言葉が見つからなかった。

なんて声をかけてやったらいい？　こんな最低な俺が、彼女になんと言ってやればいい？

……分からない。頭の中が変にゴチャゴチャしてて、言葉が浮かびあがってこない。

そんな黙ったままの俺を見詰めながら、サクラは、ずっと自分の足を差し出してきた。「？」と俺が首を傾げると、サクラはまたぐしぐしと手で顔を擦って、わんわんと泣き出した。

「うえええん……！……足、捻っちゃいましたぁ……めっちゃ……痛いですう……！」

……。

……。

……。

……は？

まさか……今泣いてるのって、そっち？

彼女が痛いと言ってる場所を見てやると、足首が捻挫していた。赤く腫れ上がっているから、おそらく歩いてるか走ってる最中で思い切り捻ったんだろう。

がくつ、と肩が落ちた。なんて言うか……見当違いも甚だしいというか、一気に緊張が途切れたというか。

やれやれ。と俺は小さく呟いて、彼女からくりと後ろを振り向くと、その場で小さく屈んだ。スニーカーの紐が解けそうだったので直そうと思ったからだ。それからついでに――。

「……ほら。背中、乗れよ」

猫又の——サクラの手当てもしてやろうと思ったからだ。
後ろを振り向いているので彼女の顔は分からなかったけれど、ずるずる足を引いて、こちらに近づいているということだけは分かった。そして、背中に人間の感触が広がっていく。もう背中まで辿り着いたのか。だとしたら……痛みも少しは引いたのかもしれないな。

彼女は軽かった。それは本当に一人の人間の女性のように軽く、それでいて華奢で。

彼女をおぶさってる間は、どうしてかさっきまでの妙な不快感も消えうせていた。まるで……最初から存在していなかったかのように、綺麗さっぱり無くなっていた。

「ねえ、啓太さん」

「ん？」

ぽふ、っと彼女が自分の顔を俺の背中に埋めたのが分かった。
そのまま、嬉しそうに、だけど何処か照れくさそうに、サクラは小さな声で呟く。

「えへへ……さっき、やっと名前で呼んでくれましたよね。私、すごーい嬉しかったです。今、すごーい……幸せです……」

「……そんなに名前で呼ばれるのが嬉しかったのかよ。猫又は変なヤツだな」

「うふふー、そりゃあ最愛な人に名前で呼ばれるなんてもう……っ

て、あー！ さっきはサクラって呼んでくれたのに、啓太さんってばひどーい！」

バタバタと背中猫又が暴れだす。

ちょ、お前怪我人だろうが。暴れてんじゃねーよ。

「知るかそんなこと。呼び方なんぞ俺の気分次第だ」

「もー！ どうすればもう一度サクラって呼んでくれるんですかー！ あっ、気分次第って事は……色仕掛けですか？ 色仕掛けなら……ほーら、おっぱいですよー？」

人の感触が背中に広がるついで、もにゅ、といった柔らかな感触も背中に広がった。

「……ば、馬鹿野郎！ 胸を背中に押し付けんなー！ 叩き落すぞー！」

「だったら呼んでー！ 呼ーんーでーくーだーさーいー！」

「わ、わーったよ！ 呼ぶよ、呼ぶからやめろ！ ……サクラ！ ほら、これでいいだろ！？」

「それからカツコイイ声で『……大好きだ。愛してる』って言うってくれきやだー！」

「……テメエ。いい加減チョーシにのんじゃねえぞコラアアアア！？」

「やだやだー！ 言うてくださいよー！！」

……やっぱ拾わない方が良かったかな、俺。拾ってもコイツ、喧しい事限り無しだ。

結局、コンビ二に寄る事も出来ず、当然レポートが完成することもない。来ず、次の日俺は、先生から倍の課題を受け取って帰るのだった。

ああ。これからは一人の時と比べて、凄く忙しくなる日々になりそうだ。

第四章 猫又の同士参上！【上】

久しぶりの快調な朝の陽射しかと思いきや、ギンギラギンにさりげなく放たれる太陽光線の光によって俺は目覚めた。

太陽も「そいつが俺のやり方！」とか言っただけで腹立たしく感じる今この頃。

今日は小春日和にしては、何処か暑い一日でもあった。温暖化が進んでいる件もあると思うけど、まず一番の原因はコイツだろうな。

「……また、コイツは……！」

俺を抱きしめたまま、密着状態ですやすやと寝ている居候猫——もといアホな猫又（アホ又）のサクラが原因だ。まず暑苦しい。そしてジャマ臭い。

普通に見れば美人な女性が俺に密着して寝るなんて、それはもうウツヒョヒョイヒョイな気分にもなるとは思っけれど……何分コイツは人間じゃないから、そんな気分は微塵にも起きやしないのが当たり前だ。……まあ、その、ナイスバディーなのは認めるけどさ、うん。

でも俺負けてないもん。誘惑に勝ってるもん。ちゃんとコイツのセクシャルハラスメントに抗ってるもん。

「……オラ、さっさと起きろ居候変態猫娘」

ポンポンポンと頭を軽く叩いてサクラを起こしてやる。

すると彼女は猫っぽく呻き声をあげて、目をシパシパと小さく瞬か

せると、こつちを空ろな目で見詰めてきた。

……髪ボツサボサやなお前。おそらく俺も同じようにはなってる
は思うけど……やっぱり髪ボツサボサやなお前。

「ふにゆう……啓太さん……？ おはようございましゅう……」

小さな欠伸を漏らして、目を擦りながら言うサクラ。

ちよつと萌えたとか思っていないから。いやマジで思っていないから。

……ごめんちよつと萌えた。

けれど屈強な俺の心はそんな事では突破出来んな。今はちよつとヒ
ビが入った程度だから、だからまだ大丈夫だから。

と、そんなどうでも良い事を考えてると、そつとサクラの手が俺の
頬に当てられた。で、いつの間にか彼女は俺から離れて、馬乗りに
なっていた。

何やってんだ、と聞く前に、彼女は無言で俺に近づいてきた。目は
いまだに空ろ……いや、とろんとしてる。ああ、分かった。これは
アレだ。いつものアレだ。エロい目だ。

口元も小さくアヒル口になっている。そして今まで無言だった彼女
は、とろんとした瞳をゆっくり閉じて、こう言った。

「おはようの……ちゅー……」

そう言った瞬間、物凄い速さで彼女の顔が俺の顔の目前まで接近し
てきた。

そこで俺は改めて唇に危機感を感じたので、すぱあん！ と一発、
近くにあったレポート用紙で彼女の頭をはたいた。

おお、すっげえ良い音したね。今年一番の良音だよ。

「いいいつだあああああいい!!?」

目前まで迫っていた彼女の唇が真っ直ぐから真上に上がる。頭を押さえて跳ね起きたからかな。

それにしても危ない。危うく唇を奪われるところだったよ。モーニングキスとか何なのコイツ、有りえないよ。ていうか絶対寝起きじゃないだろあの速さは。マジ焦ったよ。

「おお、目が覚めたかアホ又」

「『目が覚めたか』じゃないですよ啓太さん！ 別のものまで目覚めたらどうするんですかー!!」

頭を押さえて、涙目でこつちを見つめるサクラ。

……うむ、一体何が目覚めるんだろう。まあ知りたくもないが。

「知るかそんな事。そんなことよりも何でお前、人のベッドで寝てやがる。お前には居間で寝る権利を与えてやっただろうが」

俺の部屋の向かい——障子もどきを挟んだ向こう側に居間があり、そこで寝るように指示してやったのに、コイツは俺のベッドで寝やがるとは。

布団買うのにいくらかかったと思ってやがるんだ。バイトで給料入ったからいいものの……本当なら金欠で死に掛けてたんだぞ今月は。

「だってえー、夜な夜な寂しいんですものー。あの障子もどきの向こうに啓太さんが寝てるなんて想像したら、とてもムラムラして一人じゃ寝れませんよー」

「だからといってベッドに侵入していいとは言ってねえぞ。……っ

ていうかお前、俺に何もしてないだろうな？」

「あっ……うふふ、ひみつ」

「……もう一発食らいたいようだな。ちょっと待ってる」

「……ああん！ やめて、本当にやめて！ もう一発食らわされたらマジで目覚めちゃいますから！ 痛みが興奮に変わりますから！」

やっぱりそっちに目覚めるのか。マゾ又め。

パジャマから服を着替えて、洗面所で一通り準備を済ませて、それから朝食の準備にかかる。サクラはまだ着替えてるのか、居間で何かいごいごと動いてた。

今日は……昨日の夕飯の塩鮭に火を通して簡単に作ればいいか。調度味噌汁も残ってるし、これらを捨てるのは勿体無い。

あ、後食パンと牛乳がもう無いな。どうせ今日はお出かけだから、帰りにスーパーに寄っておこう。

……はい、二人分の塩鮭終わり。味噌汁も温まったかな。御飯も用意して箸とグラスを取り出して——うむ、手際いいな俺。テキパキと出来て良い感じ。

御飯を茶碗に注いで、グラスにお茶注いで、箸を用意して——後はサクラを呼ぶだけだ。

「おいサクラー。飯が出来たぞー」

「あ、はい！ 今行きます！」

ドタドタと足音が聞こえてきた。ガララッと居間の襖を開けてサクラが入ってくる。

服は白のノースリーブシャツを着ていた。下は青のデニムパンツで、涼しそうな格好だということは良く分かる。

けれどさっきの寝汗が乾いていないのか、折角着た服をぐっしょりと濡らしていた。

ちゃんと拭いてから服を着ろよ……って、ん？ あ、あれ……？
ちょ、ちよつと待てよオイ……！？

「……あ、あのさ、サクラ。それ、何だ……？」

俺はおそろおそろ彼女のぐっしょり濡れたシャツの『とある場所』を指差す。

い、いや。まさかとは思うけど……まさか……。

「えっ……あつ、きゃん！ 汗で濡れてたから、うつすら見えちゃいましたね。もう、啓太さんってばこんなトコ見ちゃ駄目ですよ」

まるで恥らう気も無く、サクラは頬に手を当てて胸を隠すフリをする。っていうかむしろ見せてる。

俺はすぐさまそれから視線をそむけ、もう一度彼女に訊いた。真偽だ。もしかしたらがあるかもしれないから、もしかしたら……。

「な、なあサクラ。お前今、ノーブラだったりするか？」

「はい。ノーブラです。しかも下もノーパ——」

結果、真偽もクソも無かった。あるのは真実だけだった。しかもオ

マケつきだった。

「あ、アホかお前は！？ さっさと着直してこい！　なんでつけてこねえんだよ！　本気でアホか！」

「だ、だって啓太さんが御飯だっていうから、ブラとパンツっけないで急いで来たんですよー！」

「そっちを優先しろよ！　急がなくていいからゆっくり着てこい！」

そう言うと、サクラは目の前の朝食を物欲しそうに眺めて、ため息をついてしぶしぶ部屋へと戻っていった。

……ぬおおおお、落ち着け落ち着け落ち着け……！

ペースを乱されたらダメだ俺……冷静になれクールになれ藤咲啓太……！

彼女にちゃんと服を着替えさせて朝食を取ったら、あとは予定していた通り街に出てショッピングだ。

今日は日曜日だし人通りも多いとは思うけれど、致し方ない。この間サクラとお出かけするって約束したばかりだし、すっぽかすとアイツ泣くし。

財布は……持った。ハンカチ、ちり紙、持った。サクラ……いる。よし、大丈夫だな。

「それじゃ行こう。サクラ、準備は出来たか？」

「あ、はい。準備できました。……えへへ、お出かけ楽しみです♪」

えらくニコニコ顔でサクラが言う。そのまま、するりと自分の腕を俺の腕に絡ませてきた。拒もうとしたけど時既に遅し。そのままガツチリとホールドされてしまった。直ぐに腕を離すと「あーん、いけすー」とか言ってサクラが渋ってきた。

……いけすじゃなくていけすなのか。

アパートを離れて、直ぐ近くにある街——『桜ヶ丘商店街』を彼女と一緒に歩く。向かう先は……まあ無難に本屋、映画館、ゲームセンターとかにしようかな。

それにしても朝だというのに人通りが多い。サラリーマンや学生というよりは、カップルが多いのがムカつくな。ジャマくせえからその辺で爆発してほしいな。

……え、俺？俺は違うよ。猫と飼い主だから、うん。

雲ひとつ無い空から浴びせられる五月の日差しは思っていたよりも強く暑い。サクラもその日差しをモロに食らってるせいか、傍でぐったりと頂垂れている。

「……ああん。啓太さん、直射日光がヤヴァイです……身体が火照って仕方がないです……」

「猫又って直射日光に当たると駄目なのか？」

「そーですう……だからその辺の路地裏に隠れて、火照った私の胸辺りとか撫でてください……つか揉め！ いやらしく揉みしだけ！ Please! Touch Me! h a r r y ! h a r r y !」

うお、弱ってたのにいきなりテンション上がったなコイツ。びっくりした。凄いびっくりした。何気に英語が流暢なのが更にびっくりした。

しかし、そのまま路地裏に入るとかは俺の予定には入れてないので駄目だ。予定に入れて無くてもしないけどね。

とりあえずサクラに適当返事っと。

「啓太さん、身体が熱いです……」

「今日は暑いからねえ」

「なんだか凄く火照ってます……」

「今日は暑いからねえ」

「身体がとろけます……」

「今日は暑いからねえ」

「私、頭が変です……」

「それは元々だ」

「ひ、酷い！」

着いたのは一軒の本屋。俺の行きつけの本屋だ。主に『月刊猫通信』を買う時に良く寄っている。

相変わらず古い老舗のような印象のある『東海書店』と書かれた暖簾^{れん}だが、店主が清潔なのか、店の中は綺麗に清掃されている。

書店に入る前に、適当に一冊持ってきてもいいよとサクラに告げて、彼女を店内に放す。

「わぁー」と興味津々の声を上げてサクラは本屋の中に消えていった。俺も軽い足取りで中へと入った。

……さて、俺はいつもどおり猫通信を買って出るかな。

数分ほどして、彼女が一冊の本を持って戻ってきた。調度いい。会計を済ませようと思ってたところだ。

ニコニコしながら、サクラが俺に本を手渡してきた。それほど分厚くないから、値段も安価かな。

「啓太さん、私これがいいです！」

「ん。そうか。どれどれ……」

価格680円。ふむ、妥当だ。これくらいならいいか。
くるりと裏返して表紙は……。

……。

……。

「……戻してきなさい」

「ど、どうしてですかー！ 折角いいの見つけたのにー！」

「……ちよつとでもまともな本を持つてくると信じた俺が馬鹿だったよ。『世界の縛りの極意』とか、そんな危ない本はやめて普通の雑誌にきなさい」

「えー！ じゃ、じゃあ『種植えの伝授』とか『振り向かない彼をメロメロに』とか『鋼心の男の落とし方』とかは」

「普通の雑誌にしろってんだろーが！」

全部あぶねーんだよ。誰に対しての対策なのか目に見えてるわ。

全部却下されたのが不満なのか、サクラは頬をリスのように膨らませて、しぶしぶと本棚から女性向けの雑誌を手にとって持ってきた。

ちよつと高かったけど、まあいいや。これで普通の女性の思考になったらいいんだけど。

……あ、因みに猫通信はサクラに気付かれず買おうとした所、結局見つかって叱られました。

……ぐすん、別にエッチなヤツじゃないからいいじゃないの。

本屋を出た俺たちは今、とある場所に向けて歩みを続けている。まあ、とある場所といっても、スティックをガチャガチャと回してボタン連打を繰り返す格闘ゲームや、クレーンを操ってガラスの向こうにある景品を上手にキャッチして穴へと落とす……説明が長いな。つまりゲームセンターに向かっているというわけだ。

隣には鼻歌を歌いながら上機嫌で歩いているサクラがいる。その彼女の黒髪は五月の風に煽られて、ふわふわと揺れていた。

……アイツの髪も、風に煽られながら、こんな風に揺れてたっけ。長くて黒い髪が、優しく靡なびいていたっけ。

サクラと一緒に暮らし始めてから、早一ヶ月が過ぎた。最初の頃から異様にテンションが高くて、隙あらば俺を陥れようと、様々な色仕掛けを繰り出してきた。

けれど、もう一度追い出されるのが怖いのか、あまり度の過ぎたエロ行為はしてこなくなった。……エロ行為とエロ発言さえなければ、清楚で可愛い猫又様なんだけど。

涙を流して大笑いする顔も、真つ赤になって怒る顔も、肩を落として落ち込む顔も、何もかも似ていた。昔のアイツに……良く似ていた。

サクラがアイツじゃないのは分かってる。けれど、面影が有り過ぎて名前を口に出しそうになることもよくあった。見間違えるくらいに、もしかすれば、サクラはアイツの生まれ変わりなのではないのかと疑うくらいに。

けど、そんな期待が無駄だってことは承知の上だ。アイツはもう、俺の隣にはいない。今、俺の隣にいるのは、桜の木の下で拾った猫——いや、猫又のサクラ。

あれだけ過去を振り返らないと誓ったはずなのに、俺はまだ、ずるずるとアイツの影ばかりを追っている。そんなじゃ駄目だ。いつまでも過去ばかりを見詰めていても、新しい道は開かれては来ないから。今を逃げてたら、新しい未来は見えてこないから。

だから……俺はもう、隣にいるサクラをアイツと重ねたりはしない。重ねても、ただ無意味に悲しくなるだけだ。無意味に……むなしくなるだけだ。

サクラを……彼女を、一人の存在として、一つの生きている存在として認めた。過去の存在として映し出すことを止めた。

そうしなければ……いつまでも俺は、彼女の影を、あの時の後悔を背負って生きていくと思うから。

気付けば、目の前には小規模のゲームセンターへと到着した。隣に居たサクラは「うひゃー！」と興味津々という声を上げて、目をキラキラ輝かせていた。

「わー！ 啓太さん、ここがゲームセンターですか！？ 私こういうところ初めてなので、すごい緊張します！ でもワクワクもします！」

「なんで緊張するんだよ」

はははっ、と笑って、俺はサクラの頭をわしわしと撫でてやる。いきなり撫でられて焦ったのか、彼女はワタワタとぎこちない身振りで慌てた。顔も少し赤かった。

……何だ、いつもエロいことばっかしてくるくせに、可愛らしいトコあるじゃん。

不意をつかれたからかな？

休日のゲームセンターだというのに、お客の数はそれほど多くは無かった。

三十代くらいのサラリーマン風の男が、仕事の休憩時間の暇つぶしに奥の位置にあるコインゲームをやっていて、その他には高校生くらいの男女が数人集まってクレインゲームをやっている程度だった。

……おお、惜しい。もうちょっとで大きな犬のぬいぐるみ取れてたのに。彼女にでもプレゼントするんだろうかな。めげずに男子がチャレンジする傍ら「がんばって」と応援する女子がまた初々しいな。青春を謳歌してるねえ。

「啓太さん啓太さん！ あの人形凄く可愛いです！ めっちゃ可愛いです！ 私の可愛いメーターで言うところ53万くらいの可愛力です！」

「それはまた宇宙空間でも生きてそうなくらいの可愛力だな」

サクラが指を差すもの。それはガラスの向こう側にある、クレインゲームの景品だった。

猫が侍の格好をして「たたきるにゃ！」とか言ってポーズをとっている人形だけれど……うん、確かに可愛いかも。

「まあ、でも取らないけどな」

「えええー！？ そこは雰囲気を感じてくださいよー！ 取ってくださいー！ 取ってくれないと啓太さん犯すー！」

うお、すごい物騒なことを平然と言いやがったなコイツ。そんなにあのぬいぐるみを取って欲しいのかよ。

仕方ねえ。コイツが言うところ冗談に聞こえないから、今回は甘やかす

か。一回二百円って結構高いのに。

コインを二枚ゲームに投入して、適度に位置を確認しつつ、目標の物（侍にゃんこ）までクレーンを動かす。

すると、あっさりと目標の物はクレーンに挟まれ、穴の中に落ちていった。腕は落ちてなかったな、俺。

「……ほらよ。これが欲しかったんだろ？」

「わあ……！ 啓太さんありがとーございます！ 微妙に喜びます！」

「普通に喜べよ」

そんな呟きもサクラには全く聞こえてないのか、表情を歪ませて……もとい、笑顔になった。

「啓太さん。この人形は適度に大切にしますね！」

「普通に大切にしろよ」

そんな呟きもサクラには全く聞こえてないのか……って聞けよお前！

微妙だ適度だって、ちょっと悲しくなっただろが！

景品を大切そうに抱えてニコニコ顔でいるサクラと一緒に、今度は彼女の要望でプリクラへ。

そのプリクラは最新鋭なのか知らないが、価格が五百円と高価だった。最近のプリクラって一回の値段が凄い高い気がするんだけど、気のせいかな。俺が高校の時に撮ったプリクラはもっと安かった気

がするけど。

仕方なくコインを投入して、フレーム決定や大きさ設定などの操作を続ける。

俺はどれでも良かったから、サクラが良いと思うやつを選ばせてやった。そしたらまあ……恋人同士が選ぶようなラブラブなフレームを選びやがったよコイツ。恥ずかしいなオイ。

「ほらほら、啓太さん！ そんな無表情じゃ駄目ですよ！ もっと笑ってください！」

「笑うつてもなあ……俺作り笑い苦手だし」

「それなら控えめに笑うくらいでいいですから！ ……ほら、もう撮りますよ！ いち、にの……さん！」

サクラの声と共に、プリクラのフラッシュが光る。俺はぎこちなく笑って画面を見詰めた。サクラは俺の肩に頭を置いて、にっこりしながら写していた。

一枚目は普通に撮れたかな、と思っていると、すぐさまプリクラが二枚目を写す準備をし出した。ちょ、お前早いな。もう少し待てよ。三、二、一……と、二回目のフラッシュが光ると同時に、今度は頬に柔らかい感触が一瞬だけ伝わった。

……え、なんで？

その感触が伝わった方へ顔を向けると、そこにはサクラの顔が間近にあった。何故だか、凄くニヤニヤしてこっちを見ていた。

……ま……まさか、まさかこのアホ……！？

冷や汗がぶわつとあふれ出る状況で、またもやプリクラが最後の一

枚を写す準備に入った。その瞬間、サクラに『がしっ！』と顔を手で固定された。

何事だ、と声を発する前に、サクラの顔が俺の顔に高速接近してきた。再び自分の唇に危機感を感じた。

……あれ、これ朝のデジャヴ？

「さ、最後はディープキスで写すのがラブプリクラの相場……！」

「ドアホ！」

……結局、最後のプリクラは俺がサクラの頭にチョップを入れてる写真になった。

しかもそれは、彼女の頭にチョップが炸裂した瞬間、タイミングよくフラッシュが光った物だった。

プリクラから出て、直ぐ近くのベンチでゆっくり一休み。俺にはたかれた箇所（頭）を手でさすっているサクラは、出てきた三枚のプリクラをじーっと眺めている。

……と思ったら、いきなり彼女の顔が綻んだ。ああ、ホクホク顔ですっごい幸せな顔してる。今だけでいいから俺にもその幸せを分けてくれよ、マジで。

「やーん、もうこれ最高ですー」 すっごくタイミングよく写ってますー」

「ん、そりゃどれだ？ ……ああ、一番最後か」

「一番最後なんて論外です！ 二枚目ですよ二枚目！」

二枚目？ と首を傾げる俺に、サクラがプリクラを一枚手渡してきた。おそらく、それが最高なんだと言ってるヤツだろう。どんなヤツだったっけと思い、改めてじっくり見てみると……。

「……………」

「ね、最高でしょう？」

……思い出した。二枚目は……迂闊にも俺がほっぺにキスをされてるプリクラだった。

しかしまあ、一瞬とは言え、本当にタイミングよく取れてるなコレ。狙ったんだろうとは思っけれど、ちょうど彼女の唇が俺の頬に触れ合ってるし。

……やべ、何か恥ずかしくなってきた。すっげえ恥ずかしくなってきた。頬にまだ唇の感触が残ってるような気がするし。

「これで啓太さんのチョップが入らなければ、三枚目は濃厚なちゅーで決まってたのに。ああもう、本当に惜しいです。悔しいです！」

「惜しくねーし、何処の芸人だお前は。それにプリクラでキスなんてすんじゃねえよ恥ずかしい。まだ隠れてるからいいけどよ……」

「あら、私は公衆の面前でも全然大丈夫ですよ？ なんならココであっーいキスを……」

「よし、次行こうか」

よっこらせとおっさんみたいな声を上げて立ち上がり、さっさと歩き出した。

後ろからサクラが「あーん、タコスうー」とか言ってた気がしたけ

ど無視しておいた。

……今度はタコスか。そろそろ無理あるぞ。

ゲームセンターを出て桜ヶ丘商店街一丁目通りをそのまま直線に行き、一丁目と二丁目の境にある時計塔を左に曲がった先の、三丁目にある映画館が次に向かう先だ。

この映画館も先ほどの本屋のように昔から由緒があるというか、この街に設けられてから既に数十年が経過している。とは言っても近來の映画ブームで利潤が上がったせいも、以前俺が見た映画館よりも内装、外装ともに綺麗にリニューアルされている。客足も少なくはなく、人気の映画は既に満席と電光掲示板で流れていた。

「啓太さん啓太さん！ 私アレが観たいです！」

くいくいと服の裾を引っ張って、サクラが俺に言うてくる。

「ん、そりゃどれだ？ ……言うておくが、えっちいやつは駄目だぞ」

「うそん……ま、まあえっちやじゃないから大丈夫です！」

彼女がはしゃいで指をさす映画は……まあ何というか、かんというか。

【猫又の恩返し】

「……これまた大ヒット映画に影響されました感が漂う作品だな。で、お前本当にこれでいいの？」

「全然いいですよー。……あぁ、啓太さんが駄目ならこっちの【真夜中の甘美な喘ぎ声】ってタイトルの映画にしますけど?。」

「よしこっちにしようか。こっちに決定だな。ほらさっさとチケット買っぞサクラ」

「あぁん即決うー」

彼女の手を引いて映画館の中へ入っていく。二つ目に提案した映画も観たかったのか、サクラはちよつと渋った様子で俺についてきた。別に俺はそっちの映画でも構わないが、そんなモン観たら絶対コイツ映画館で発情するだろ。劇場内で性欲を激情されても困る。

何でも無いときでも発情してんのに、火に油注ぐような事出来るかっての。

感動的な映画を見た後って必ず足元がふらつくんだけど、それは果たして俺だけなのだろうか。

内容は猫として拾われた猫又が主人に色々恩返しをしようと頑張る話だが……シンプルな設定とは裏腹に、笑いあり、感動ありをふんだんに含めた、良い映画だった。

喧しかった劇場を出て外のベンチに座ると、サクラはまだ映画の余韻に浸っているのか、終始ぼーっとしたままだった。

「いい映画でしたねー……」

「あぁ、そうだな。……お前もいつかは俺に恩返ししてくれよ。食費とか色々浪費せずにな」

「あら、私はいつも啓太さんに（性的な意味で）恩返ししようとしてますよ？ 啓太さんがそれを拒むんじゃないんですかあ」

「普通に恩を返してくれ。掃除をするとか、料理を手伝うとか、色々あるじゃないか。日々の積み重ねの恩返しでも俺は構わないんだぞ？」

「だってお互い気持ちいい方がいいですしい！ …… 啓太さんは泣かなかったのですか？ 実はですね、スタッフロール中はずっと啓太さんを見てたんです」

「……俺を？」

じつと見られてたのか。全然気がつかなかった。映画に意識を向けてたからかな。

人の肩に頭をもたせかけて見てるもんだから、半分寝てるのかと思ってたよ。

でも知らないうちに見られてたって何か恥ずかしいな。

「あ、でも主に見てたのは啓太さんの股間あたりですけどね。ふふっ、危うく手が出そうでした」

「はじめてまざれ」

やはりこやつは言うまでもなく変態だった。
結局どんな映画観ても発情してんじゃないか。

第五章 猫又の同士参上！【下】

映画も観終わって昼食もその辺のフードショップで軽く済ませ、俺とサクラは別に行くところもなく街を歩いていた。

その間もサクラはずっと「あの綺麗なお城に行きましょうよー」とか言って渋っていたが無視しておいた。

お前その綺麗なお城がどんなところか絶対分かってて言ってるやろ。さっきからずっと言っとるやないか。

「ねーえー、けーいーたーさーん。おーしーろー。いーきーまーしよー」

「駄目だ、そこへは断じて行かない。まだ時間あるんだし、たまには当ても無くぶらぶらしたっていいじゃねーか」

「ぶらぶらしていいものは啓太さんの股間にあるものだけで十分ですよー!」

「年頃の女性がこんな正午に言う台詞じゃねえな。まあ今更だけど本当に今更だけだな。よくまあこんな変態台詞を聞いて周囲の人たちが変な目で見詰めてこないよ……あ、見詰めてた。」

柱に背をかけた金髪のアスト風になーちゃんがじっとこっちを見詰めてた。

やだ、あのイケメン。どこの芸能の人かしら。写メ撮っても怒られないかしら。知人の女友達にブロマイド売ったらお金になりそうなくらいのイケメンね。

と、そんな別の意味で卑劣な事を考えていると、そのホスト風お兄さんがこつちに近寄ってきた。服装は上下白スーツに、胸ポケットにはバラの花を1本入れてある。

……もしかしてサクラに「いい店紹介しますよ、お嬢さん」的な事でも言うつもりだろうか。あんまりコイツに悪影響与えたくはないんだけどな。

ていうか男連れの女性をホストクラブに誘うか普通？ 何か裏がありそうだな。

ざつ、ざつ、ざつ。とホスト風お兄さんは俺の前で止まった。そして何を思ったか、そのお兄さんは俺をその両腕でぎゅっと抱きしめた。

……。

……。

……。

……エ、エーイ？

ぶわっ、と冷や汗と油汗と体液が出た。こんな公衆の面前で男に抱きしめられるという事態を理解不能なままに引き起こして、しかも周囲の人は何事かと驚いて見てるし……あと一部の人は写メ撮るの

止めてください。こんな光景データフォルダに残さないで下さい。
むしろ記憶から消してください。そしてホストのお兄さんは離して
ください。ああ、もう何か腹立たしいからお兄さんの事ゲイって呼
んじゃう。ホスト風ゲイって呼んじゃう。

……あつ。やばい、この空気耐えられない。泣きそう。マジで泣き
そう。号泣しそう。こんなところで泣いたらシャレにならんと思っ
ていても泣きそう。

俺の悲しみの涙腺崩壊一步前——といったところで、ホスト風ゲイ
が俺からぱつと腕を話した。
その瞬間、後ろで呆然とその光景を見詰めていたサクラが我に返っ
て、殺さんばかりの勢いでホスト風ゲイの首根っこを掴み、締め上
げた。

「啓太さんに何しとんじゃあ、こんの腐れ外道がア……！？」

両手でホスト風ゲイの首をぐいぐい絞めて、上へ上へと持ち上げる
サクラ。聞いた事もない低い声のトーンからして、一瞬化け物かと思
った。まあ、化け物っちゃあ化け物だけど。

両目を上目遣いにしてジャンキーのように瞳を血走らせたと思っ
たら、今度はその目玉をギョロギョロとあちこちに移動させ、眉間に
皺を寄せて男に凄まじい眼光を浴びせている。

ねえ、これ何のホラーですか？ そんな彼女を間近で見ている僕は
恐怖ゆえに失神しそうなんです。

「……がつ……！？ な、なにつて……ス、スキンシップ……だけ
ど……！？」

「スキンシップ？ スキンシップですって？ 見知らぬ人にいきなり抱きつく事が貴様のスキンシップと申すのかこの変態純白薔薇ゲイホスト。ならそのスキンシップのお返しにその頭スキンヘッドにしてシップ貼ったるかコラ？ 望みどおりスキンシップしてやつぞコルア？ ペタペタ貼ったるぞコルア？」

サクラがまた無茶苦茶を言ってる気がするけど、もう何か今は弁解する気力もない。

同姓に抱きしめられた事により俺のガラスハートはもう粉々です。修復不可能です。今まで本当にありがとうございました。

「男に抱きしめられた……ちょっとその路地裏に入って泣いてくる」

「ああん啓太さん泣かないで！ 後で私が（ベッドの中で）いつばい抱きしめてあげますから！ そっそれに泣きたいなら私のお胸でお泣きなさ——」

「気遣いありがと。でも、それもそれでヤヴァイから御免被るよ……ぐすつ」

「……と、とにかくおろして死ぬ……お迎えが来る……！！」

「ああん？ んなこたア関係ねーです。貴様はさつさと天に召されてしまえなのです。……まさかてめえの血は桃色かぁッ！？ だから脳内もピンクなのかア！？」

……どっちかって言うど薔薇だから赤いイメージがあるんだが。いやでも血が赤色だと普通か、普通だな。

それより、そろそろマジでサクラを止めた方がいいかもしれない。

なんかホスト風ゲイ、顔が真っ青に染まってきたるし、彼女は一向に手を離す様子も見せないし。

俺は別にこんな変態がこの世から消えても眉ひとつ動かんのだが、流石に天下の大通りでもある商店街で殺人犯しちゃ良心が痛む。

というわけで俺は今だにグイグイと締め上げてるサクラをよつこらせと引き剥がした。目つきはちょっと落ち着いてたが、まだ威嚇中の猫目になっていた。

「はなしてー！ 離してください啓太さーん！ こんな奴がこの世にいるから、この世にいるから……男女均等社会が成り立たなくなってしまうじゃあああああッ！！！」

いや、流石に知らんよそんなことは。

「がはっ……サンキューだよミスター啓太。さすが僕と同類の人だ」

勝手に同類にすんな腹立たしい。俺は貴様のようなホスト風ゲイの仲間になった覚えはない。

あとキモいからウインクしないで下さい。温厚な俺でも手が出そうになりました。白くて綺麗な歯を血で染めてやりたくまりました。

「貴様あッ！！ まだそんなたわけた事を言うつもりか！？ しかも啓太さんをオンドレのような唾棄すべき下等変態薔薇男と同類にするなど……やはり貴様、血の色は桃色か！？ ピーチなのか！？ 甘いのか！？ 店頭で売ってるのかッ！？ それとも店内で売ってるのかッ！？ どっちなんだあああああッ！？！」

いや、だから知らんよそんなことは。そんなこんなしているうちに、首元を押さえながらホスト風ゲイは、

俺らに向けてぽつりと呟いた。

「ははは……つれないねえ。君も同じ『猫又』なんだろう？ だったら同類同士、仲良くしようよ」

……は？

猫又って……

しかも君も同じって……

「お前、もしかして猫又なのか！？」

……やっぱり猫又って変態ばかりなのか、そうなのか。

「……というわけで、アパートに帰ってみたものの……」

テーブルの挟んで三者が見詰め合うこの状況、正直、息苦しい。というのも、サクラが自分の足を俺の腰に絡めてエロい姿勢で抱きしめてるから物理的にも息苦しいわけだけでも。

向かいのイスには先ほどのホスト風ゲイが座っている。なにやら誤解だの事情を説明するだのと言いやがったから、こうして部屋に上がらせているわけです。

「啓太さん。こんな顔だけの下ネタモザイク野郎なんて追い出して、早く二人でキャツキャウフフしましょうよ。『突いて突いて突きまくるーそれが私だー！』が啓太さんのポリシーでしょー？」

「そんなラッ。ーマンのテーマを卑猥に変えるようなポリシーなん

ぞはなから持つとらんわ。あと人の股間で腰を上下に動かすな、マジで、いやマジで、頼むからマジで止めて、マジで止めてくださいサクラさん」

何とか平静を保ちつつも（本当に良く保てたな俺）サクラをどかし、て本題へと移る。ついで股間が平静だったことに驚いた。

良く頑張ったねマイサン。でも今では不全かどうか何よりの心配だよ。

「……それで、さっき話を聞いた通り、お前は真正正銘の猫又なんだな？」

「うん。猫又。それと僕の名前はジャック。猫又のジャックだよ」

「あ、脳のキャパシィ減るんで自己紹介とかいいです。うぬは早く野生にお帰りくださいな」

「サクラ、お兄さん達のお話のジャマになるから、お前は向こうにいなさい。テレビでも見てなさい」

「……ぶー。いいです。こないだTATUYAで借りたDVDを向こうで見えます」

しゅしゅ言いながらその場を離れていくサクラ。そつえばTATUYAに行くとか前に言ってたな。変なの借りてないよな。カードは俺のなんだから履歴残るんだぞ。

「……さて、さっきの話だけど、何で俺に——」

『おおうトメ吉イ！ ほら良く見てみるよ、このたくましく屈強な筋肉を！』

「……抱きついたのかと……」

『なんて綺麗で神々しいんだサブ兄イ！ 今すぐ土木工事を止めて俺を工事して——』

「……お前がどこの猫又で……」

『サブ兄イイイイ！』

『トメ吉イイイイ！』

そこまで隣の部屋から聞こえたところで、俺は猛ダッシュでサクラのいる部屋に向かった。

そしてドアを開けた瞬間、声を張り上げて怒鳴った。

「イヤホンにしろやコラアアア！！ っていうか俺のカードで何つうモン借りてんだテメーは！？」

「えっと…… 『土木工事の男ども〴〵揺れる象徴インバイト』 ってDVDです。新作だったので、つい」

「『新作だったので、つい』 じゃねーよ！ 新作映画なら何でも適当に借りていくおばさんじゃねーんだから！ しかもそんな偏った使用法の象徴にインバイトされてんじゃねえ！！ そもそも俺はそんなもん借りていいなんざ言ってるぞ！？」

「仕方ないね」

「仕方なくねーよ!? 何勝手に自分の行為を正当化してるわけ!? そっちがその気なら俺その幻想をぶち殺すよ!」

「あの……話の続きをしたいんだけど……」

申し訳なさそうに部屋の隅で顔を覗かせるジャックくん。ああ、そういうえば彼女のツツコミで本題忘れてた。

申し訳なさそうな顔の彼に俺は申し訳なさそうな顔で謝ると、元居た場所まで戻って話を続けた。

話を聞くと、何でも彼は本当はゲイとかの類ではなく、普通の猫又であるという事が明らかになった。では何故俺に抱きつくような真似をしたのかとたずねた所、俺を自分と同じ猫又と勘違いしたというらしいのだ。

というのも、人間か猫又かを区別する匂い（つまりサクラの匂い）が俺に染み付いていたせいなのか、同類を見つけた嬉しさで抱きつく相手を間違えたらしい。

……まあ、もし俺でなくサクラに抱きついてなんかいたら、間違いなく彼女に殺されてたと思うけど。

「ふーん。まあ、君がゲイじゃなくて良かったよ。俺も抱きつかれた瞬間脂汗がどばつと出たしな」

「だ、抱きしめただけでゲイってのもどうかと思っけどね……」

「公衆の面前だし誤解されるだろ？ それに俺にちよつかいだしたらアイツが暴走しかねんし」

あんな表情のサクラも初めて見たしなあ。いつもニコニコ顔か泣き顔かエロい顔ばっかだけど、あれほど狂気に満ちた顔は俺も知らなかった。

……大学の合コンとか飲み会誘われたら問答無用で却下されそうだよれやれ、ヤンデレは怖い。

「そ、そうだね。確かに本当に殺されそうだったし……これからは気をつけるよ」

「うむ、気をつけてくれ。……そういやお前、どこに住んでんだ？ 猫又って言ったが、まさか野宿とかじゃないよな」

「僕？ 僕はあの屋敷に住んでいるよ？」

そう言っただジャックは窓の外を指差す。アパートの目の間には一直線のストリートが並んでいたが、その向かいの先のお屋敷って……。

「……こりゃまたびっくりしたな。まさか宇都宮の屋敷に住んでるとは……」

身なりからして高級そうな格好してるとは思ってたけど、まさか大富豪の屋敷に住んでるとは思ってもなかったな。

てことは今コイツがつけてる貴金属って全部高級品ばっかってことか、そうなのか。さっきから腕につけてるキラキラした金時計も本物か。

金持ちでイケメンとか爆発すればいいのに、マジで。

「うん。まあ居候してるって言った方が正しいかも。……ちよつと連絡してもいいかな？ 何も言わず出てきたから……」

ごそごそとポケットから携帯を取り出して言うジャック。

それに対しおー、いいよと適当に相槌を交わして俺はテレビのチャネルをパチパチと変えた。

……うっ、巨人が中日に負けとるがな。最近調子悪いのかな。

「……ああ、うん……今……の家……ん？ ……うん、まあ、いるっていえばいるけど……大人数でなければ大丈夫だと思う……うん、うん……分かった……それじゃ」

それだけ言っただジャックは電源を切った。

はて、何やら神妙な表情だけど何かあったのかな？

「啓太。うちの静姉……宇都宮静菜が是非ともそっちの猫又を見てみたいって。だから今から問答無用で来るよ」

「……マジで？ え、ちよつ、待ってくれ！ まだ全然支度とかしてねーぞ！？ それに客人を持って成す菓子折りやら清潔感漂う部屋とか……ああもう少し待ってくれー！」

「……啓太って意外と几帳面なんだね。でもまあ大丈夫だよ。どんな猫又か興味本位で見に来るだけだから、そんな丁寧にななくても大丈夫かと……」

苦笑がちに笑うジャック。とはいってもお客様が来るんだったら部屋ぐらいいは片付けといた方がいいし、それに屋敷の主が来るんだったら尚更だ。

せめて乱雑に散らかった雑誌（主にサクラのやつ）を片付けて入り口付近を軽く箒で掃除して……とか考えていると、ピンポンというチャイムの音が鳴り響いた。

うわわ、宇都宮さん早いよ。

「あ、もう来たみたいだね。ちょっと呼んでくるよ」

それだけ言ってジャックは玄関の方へ行ってしまった。俺もその後を追うように玄関へ向かった。

……うーん、宇都宮静菜って一体どんな人なんだろう。屋敷の主つてくらいだから、それはそれは高貴なお方なんだろうか。

扉を開けると、そこには俺の想像した通りの女性が佇んでいた。ナチュラルカールの黒髪に、白いチュニツクとフレアスカート。穏やかで優しそうな顔つきとおっとりとした雰囲気から、お嬢様といった印象がとても強く感じられる。

けれどそれと同じように屋敷を担う主人としての威厳と、芯がしっかりしてそうな真面目な感じが漂ってくる。この人が宇都宮静菜さんか。うん、俺の想像したとおりの人だ。

宇都宮さんは俺の姿を確認すると、その場で深々とお辞儀した。

「こんにちは。それから突然の来訪申し訳ありません。私の名前は宇都宮静菜。そちらの……猫又のジャックの主人です」

そう言うのにこりと笑顔を向ける宇都宮さん。うーん、眩しい。笑顔が眩しいなんて俺初めて思ったよ。

「あ、いえ。そんな畏まらなくてもいいですよ。こちらこそ、わざわざこんな部屋にご足労頂いてすみません。えっと、何か用意する

ので上がってください」

「いえいえそんなお気遣いなく。今日はそちらの猫又さんをご拝見するついで、ジャックを迎えに來ただけですの」

「僕、ついでなの？」

「ええ、ついでです。……ほら、ミいちゃん。私の後ろに隠れてないで、早く出ていらっしゃい」

ミいちゃん？

……あ、そういえば宇都宮さんの後ろに誰かいるな。腰辺りに小さな手が見えているな。

子供……じゃないな。どうみても静菜さん。代前半……俺よりちよっと年上くらいだろうし。

「ご挨拶なさい。大丈夫、怖くないから」

宇都宮さんはそう言って後ろにいた子の肩を優しくトントンと叩く。その子は宇都宮さんの後ろからそつと顔を覗かせると、俺の前にまで歩いてきてぺこりとお辞儀した。

その瞬間、俺の思考は停止した。あれだ、強烈な波動が俺の脊椎を殴りつけたというか何というか。

今俺の目の前にいるのは、猫又だ。サクラやジャックが人と全く同じ姿だからあまり猫又としての違和感がなかったんだが……この子は違っていた。

今なら猫又っていう存在が本当にいるんだってことを確信持って言える。

……そりゃあ、猫ミミとシッポが目の前でひよこひよこ動いてたらなあ。

髪の色は金髪ではなく金に近い茶色で、ボブカットに切り揃えている。

その幼い顔立ちから見て十代中盤くらいだろうと想像できる。

しかし何だろう。この『守ってやりたい』オーラは。世のお兄さん諸君を妹萌えという名のコキユートスに叩き落すかのような容姿に、あどけない感じの純粹さ。

デンジヤラス満載の最終兵器少女とも言えるなこの子は。

まあ結論で言うと、すっごい可愛い。愛でてやりたい。

「あ、あの……はじめまして。ミーナです……」

その最終兵器少女はミーナと言う名前らしく、ああそれでミいちゃんなのか、不謹慎にもなんとか村の時期党首様かよと迂闊にも考えてしまった。

年はだいたい人間から見て十四くらいだろうか。猫又だから正確には分からないけれど。

「あ……は、恥ずかしいから、そんなに見ないで下さい……」

ミーナちゃんは俺の変な視線に気付いたのか、恥らうように（恥らってるが）猫ミミとシッポを隠す。

……あー。これはヤバイな。洒落になんねえ可愛さだ。崩壊を導いた混沌の世に差し込む一筋の天光のようで、俺にはその姿が眩しくて直視できない。

いや、神は言っている。この光景から目を逸らさず、そしてこの可

愛さを認めて跪けと。

「この子はジャックと違って、まだ人間と同じ姿にはなれないんです。理由は分かりませんが……まだ幼いからかもしれないですね」

……おっと、宇都宮さんと対話中だったのを忘れていた。

危ない危ない。危ない妄想から抜け出さないと。冷静になれ俺よ、クールだクール。

「そういえば藤咲さんも、猫又さんと同居なされているらしいですね。えと、どちらに……？」

「あ、すみません。それじゃ呼んで来ましようか。　　おい、サクラー！」

どうにかミいちゃんから視線をそらし、奥の部屋にいるサクラを呼ぶ。が、応答なし。

……まさかさっきのアレをヘッドホンで見てるから反応しないってやつか？　　だとしたら一度部屋に戻って彼女を呼んでこなければ。

お客様でもある宇都宮さんとミーナちゃんにそんな光景ヒラオを見せたくないからな。特にミーナちゃんには見せられねえ。一生涯のトラウマになっちまうよ。

「すみません、ちょっと見てきますね」

ぺこりと二人に頭を下げて、サクラのいる部屋まで向かった。さて、俺もあまり見たくはない光景だが、とりあえず呼んでこようか。ガララッ、と引き戸のドアを開けて、おそろおそろ彼女の部屋に入る。サクラ、と呼ばうとしたけれど、当の本人はすうすうと寝息を

立てて横になって寝ていた。

ビデオも見終わったのか、テレビ画面は真っ黒に染まっていた。

「なんだ、寝ちまったのか。……たく、ほら、起きろサクラ。お客様が見えてるぞ」

「……ふにゃーん……啓太さぁん……んふふっ……♪」

……うん、これはダメかもしれない。ゆさゆさ揺すつても頬を指でプニプニ突いても起きやしない。まだお風呂入ってないのに爆睡していらっしやる。今日は外に出て遊んだから疲れたんだろうか。それに未だにむにゃむにゃと寝言言ってるし、こりゃ起きる気配がないな。このまま玄関までおぶってつれていこうかしら。

「素敵な寝顔ですね」

「へっ……おわぁっ!？」

突然横から声がしたので振り向くと、そこには屈みこんで笑顔でサクラを見詰めている宇都宮さんがいた。後ろにはミーナちゃんとジヤックがいた。

……うん、これは不法侵入じゃないんだよね？ 思い切り無許可で上がりこんでるけど、いいよね。うん、一応知り合いになった身だから大丈夫なんだよね。

でも突然真横に出現するのは止めて欲しいな、心臓に悪い。

「あ、あの宇都宮さん……」

「静菜でいいですよ。……あ、それなら私も『啓太くん』で良いで

すか？」

「……まあ、構いませんが」

いきなりフレンドリーだな、とその場で苦笑がちに笑うと、ミーナちゃんがちょんちょんと俺に指を突いてきた。

「……あのね、啓太お兄ちゃん。私もミーナじゃなくて……その、ミいって呼んでも、いいよ？」

八重歯をちらりと見せて微笑むミーナちゃん……いやミいちゃん。宇都宮さん……静菜さんがフレンドリーに接しているので自分も同じようにしようと思ったのだろうか。健気だな。

「そつか。それじゃ改めてよろしくな、ミいちゃん」

同じように彼女へ微笑み返すと、ミいちゃんは『……ふにゃん』と小さく声を上げて、頬を赤く染めたと思ったら静菜さんの後ろに隠れて縮こまってしまった。

……ふむ、やはりこの子は仕草といい言動といい殺人的に可愛らしいな。そして啓太お兄ちゃんって呼ばれて今凄く嬉しいです。幸せの絶頂期です。もう俺ロリコンでいいです。っていうかロリコンです。

「あ、じゃあ僕もジャッカルでなくジャックって呼んでもいいよ？」

「オメーは前からジャックって呼んでるだろ。……っていうか本名ジャッカルって言うのか。格好いいな」

ジャッカルだから愛称ジャックか。ジャックが本名かと思ってたかな。

まあどうでもいいが一応覚えておこう。

「……それじゃ、折角寝ているところを起こすのも野暮でしようから、私達はこの辺りで御暇しましょうか。啓太くん、今日はジャックが本当にお世話になりました。もし宜しければ私の屋敷にもご招待しますので、いつでも連絡してくださいね。これ、私のアドレスです」

そう言つて静菜さんは胸ポケットからメールアドレスの書かれた紙を出して俺に手渡してきた。

携帯に赤外線受信・送信機能があるこのご時世に紙で渡すとは、なかなか古風ですね。

「あ、わざわざすみません。ありがとうございます」

「いえいえ。……それじゃ二人とも、帰りましょう」

「うん。啓太お兄ちゃん、ばいばい」

「それじゃ啓太。遊びに来たかったらいつでも来てよ。いつでも歓迎するからさ」

と、口々に別れの言葉を言ったり手を振ったりしながら、三人は帰っていった。

三人が帰った途端に、静寂な空気が俺の部屋を包み込んだ。喧騒っていうわけではなかったが、それでも賑やかな人たちが帰っていくと、少しだけ寂しく感じてしまう。

俺は隣ですやすやと寝ているサクラの頬をぺしぺしと叩いた。そろ

そろコイツを起こさないとダメだな。寝るなら布団で寝てもらわないと。

「ほら、サクラ。いつまでも寝てないで早く起きろ。こんなところで寝てたら風邪引くぞ?」

「むにやむにや……すぴー……美しいオジサマオバサマだけに華麗臭? ハハハ、お前いつまで寝言言つとんじゃドアホ」

寝言言ってるドアホはお前だ。いつまでも寝ぼけとらずに起きんか。頼つねるぞ。

それからも色々と彼女が起きるよう試してみたが、全く反応なし。なんならたたき起こしても構わなかったが、流石にそれは可哀想なのでやめておいた。

あ、でも俺が耳元で「くやしい……でも」って言ったら何故か「ビクンビクンッ」って反応してくれた。変態の条件反射なんだろうか。こういうスキルは要らないと思うな。

「……仕方ねーなア」

やれやれとため息を吐くと、俺は彼女をおんぶ……してやりたかったけれど体勢が体勢なのでお姫様だっこしてやった。

凄く失礼だが、ずしつと来るかと思ったが案外軽かった。持ち上げる時ふわっと上がったね。

一時的に彼女を俺のベッドに置いてやって、布団を敷き、再び彼女を抱っこして布団に入れてやった。二度手間だけど、まあいいか。

いつかは起きるだろう。

むにゃむにゃと幸せそうに眠る彼女を見て、いつしか笑みがこぼれた。本当に、本当に幸せそうで。悩みなんかなさそうで。

見習うべきなのかもしれないな、俺も。こういう彼女の一面を。他人を和ませられるような明るいところを。

「……やらっ、啓太ひゃんっ、そんなとこ噛んじゃらめえんっ！
心臓噛まれると感ぜるどころか死んじゃいますう！」

……前言撤回。

やっぱりコイツはアホで変態なだけのようだ。

第六章 Happy Birthday! 啓太さん♪【上】

「ハッピーバースデー梅雨……ディア俺……ってか……ハア」

外は快晴……とは全く持つて言えそうにないくらい、しとしと雨が降り続ける六月の朝。

季節は春が終わり、そろそろ蒸し暑くなる夏へと変わりつつある。この季節の変わり目が急すぎるのが怖いところだ、と俺はトイレの窓から頬杖をつきながら外の景色を眺めていたりする。

それにしても梅雨とはいえ雨が本当に長く続くな。もうかれこれ数えて一週間以上は降り続けている。湿気混じりのじめじめとした空気が広がるのは嫌いだ。てかみんな嫌いだろう。

嫌いじゃないのはカエルくらいなもので……おお、髪も幸も薄そうなおっさんがその場で滑って転んだ。腰を強打したのか苦痛に顔をゆがめながら「ハウマツチ、ハウマアアアツチ!」とか叫びながら悶絶してる。雨の時はよく滑るから足元は気をつけましょう。でも同時に笑いもありがとう。

滑って転んだおっさんの醜態を見てちよつと気が晴れた。

俺はその場で伸びをした後、トイレから出て部屋まで向かった。

部屋に戻ると猫又が身体をぐーっと伸ばしてごろごろ転がっていた。雨続きでろくに外を出歩いていないため、なんとも暇そうな顔である。

居間をごろごろ転がられるのは意外に鬱陶しかったので、俺は片足で彼女の身体をぐしつと踏んで束縛する。身動きがとれなくなったサクラは、じたばたとその場で身体を動かしながら小さく暴れだした。あー、結構ストレスたまってるねこりゃ。

「あうー、啓太さん暇ですよー。どこか出かけましょうー。出かけないなら今日は一日中啓太さんのナウい。息子と限界バトルを……あああ、足を乗せたまま貧乏ゆすりしないでー。こーえーがーふーるーえーますー。あばばばー」

何やらまた危険なことを言いそうになつてたので、誤魔化すようにサクラの背中に足を乗つけて貧乏揺すり。

当の本人はするなとか言いながら嫌がる様子も見せずに、震えた声でアニメか何かの名台詞を言いながら遊んでいる。本当に暇なんだな。

「うーん、確かに暇っちゃ暇だよな……しっかし外は相変わらずの雨だから、あんまり出たくないんだよな、俺」

「湿気がすごいですからねー。……まあ、私は一日中恋のパコパコカーニバルでも全然構わないのですけどね」

「俺が困るから却下だ。ふーむ……あつ、そうだ」

ざんざん降りの外を窓越しから見詰めていた俺だったが、ふとあることを思い出して、ポケットの中をまさぐった。

手に取ったのは携帯電話。猫のストラップがついたストライプブルーの新型機だ。サクラには同型の別カラーを持たせていたりする。アドレス帳からこのあいだ登録した番号……「静菜さん」と表示された番号へコールする。二、三秒待つて直ぐに電話がかかった。おお、ナイスタイミングだったのかな。

「——あつ、静菜さんですか。どうも、はい啓太です。こんにちは。今日も雨が続いてますね。——はい、そうです、はい。……あ、いいんですか！　ありがとうございます、それでは。直ぐに其方に向

かいますね、はい。それでは……」

ピツと電源ボタンを押して通話を終わらせる。サクラは首をかしげて、キョトンとした表情で俺を見詰めていた。

通話の内容は分かるとおり、今日は静菜さんのお宅——宇都宮屋敷にお邪魔しようというヤツだ。

……まあ、暇つぶしと言ってしまうと聞こえが悪いかもしれないが、サクラと一緒にあの大きな屋敷に遊びに行くヨ！　といった感じで遊びに行つて来る。

「そんなわけで出かけるぞ。準備しろ」

「あーい。……うふふー。どんな服きていこうかしらーん」

何故だか嬉しそうにごろごろとカーペットの上で転がっていくサクラ。

しばらく加速して転がっていったと思ったら、タンスの前で急ブレーキをかけてピタリと止まり、のそのそと這い上がって服を取り出し、転んだまま着替えたした。

ものぐさ太郎かお前は。ちゃんと立って服を着なさい。あと普通に俺がいるところでブラ取り外すのやめて。驚きで心臓止まりそうになったから、マジで。

と、言うわけで。のたのたしつつも着替え終わったウチの猫ちゃんを連れて宇都宮屋敷へ。

外は相変わらずざんざん降りの大雨。梅雨なので湿気とかが凄い。冬に降る雨は気温が低くなるから嫌なんだけど、梅雨の時期に降る雨もじめじめして嫌いだな。

なので総じて言えば雨は嫌いだ。陰鬱な空気が漂っているような、そんな気がして。

傘を差して屋敷まで二人で歩いていこうと思ったけれど、傘立てには傘が一本だけしかなかった。そういや、コイツが居候するまで一人だったから、傘なんて二本も必要なかったもんな。

また今度もう一本買っておこうか。そう思い、今日は相合傘で屋敷まで歩くようにした。それが嬉しかったのか知らないが、サクラは上機嫌で俺の肩に頭を乗せて身を寄せてきた。うむむ、中々暑苦しいなこれ。彼女のふわふわした黒髪がくすぐったくて、気持ちいいつちや気持ちいいが。

「うふふー、啓太さんと相合傘ー♪ はたから見たら愛人のように見えるかもしれませんね」

「いやそこは恋人だろうが。何でそんなドロドロしてそんな関係をチヨイスしやがった」

「だって愛人も愛する人って書きますから——ふおおつ、啓太さんの吐息、吐息が私の頬にっ……！ もっと、もっと（吐息を）いっぱいかけてっ……！」

鼻息を荒げてムッハーとか言い出した変態を軽くあしらいつつも屋敷へと歩く。あと数分くらい歩けば辿り着くかな。

朱色と黒で繊細に彩られた、西洋風のイメージを彷彿とさせる正面玄関。その玄関から更に上を見上げると、広々としたゴシック様式のような立派な屋敷がそこにはあった。

今は入り口前の柵で二人たたずんでいたのだが……その大きさに圧倒されて声も出せないような、そんな状態だった。隣にいるサクラ

も「うひょー」と言った感嘆の声を露にしていたし。

それにしても凄い。庭には沢山の色とりどりの花が植えられているし——今は大雨のせいで防雨シートを被されているが——正面玄関から柵まで黒服を着た筋肉質の人たちが厳重な態勢で屋敷を警備しているし……改めて、静菜さんが凄い人なんだと再認識した。

俺は柵についてあるブザーを押して返事を待った。数秒して、声質の高い、幼げな女の子の声が聞こえてきた。

ああ、この声は。少し前に聞いたことがある、ミイちゃんだ。ふむ、それにしても相変わらず可愛い声をしておられる。

『……みい、どちらさまですか？』

「ああ、ミイちゃんか。俺だよ。啓太だ。遊びに来たよ」

『啓太お兄ちゃん？ ……ふにゃあ、わざわざいらっしやいませ。直ぐに玄関を開けるから待っててね』

眠たそうな声を上げてミイちゃんが言う。

うーむ、もしかして昼寝してたところを起こしちゃったのかな。時間帯が時間帯だし、悪いことしたかもしれんな。

三十秒ほど待つて、目の前にあった柵がギイイ、と音を上げて開いていく。

そのまま俺たちは黒服たちに深々とお辞儀されながら正面玄関まで向かい、大きな宇都宮屋敷へと入った。

空は相変わらずの雨模様だったけれど、少し雨の強さは弱まってきた。ふむ、この状態が続けば、午後からは止んでくれるかもしれないな。

洗濯物も雨続きで部屋干しばかりだし、晴れてくれると嬉しいんだ

がな。

「おおー！ すっごいですねー！」

「……おお」

宇都宮の屋敷に入った俺たちは、その屋敷の広大さにただ驚くばかりだった。

天井を見上げれば、金色に光り輝くシャンデリアが。周りを見れば、金と銀に装飾された貴金属と、何やら高級そうな絵画や骨董品が並んでいる。美術品の知識はあまり無い俺だけど、アンティークでとても価値のあるものだということは良く分かる。保管の仕方も厳重極まりないからな。そして床一面に張り巡らされた大理石には、なんとダイヤが埋め込まれてたりもする。……これ指でガリガリしたら取れないかな、ダイヤ。

そんな感じで穴が空くほど床を凝視してたら、玄関から先にある階段の一部屋から、ミイちゃんとジャックが出てきた。

ミイちゃんは普通の身なりだったけど、ジャックはなんか頭ボツサボサの、客人を迎える風貌とは思えない、Ｔシャツにカーディガンを羽織った程度のラフな格好だった。

「いらっしやーい」とすっごく眠そうな声でジャックが言うと、サクラが腕を組んで、卑屈っぽく口を尖らせて言った。

「ちょっとー、ジャック。その格好は何なんですか。顔つきだつてサマージャンボ宝くじに二億円当選して大歓喜といったところで下一桁が違ふことに気付いて崩れ落ちたサラリーマンのようですしー。もっとシヤンとしてくださいよー」

「お前の例えは良く分かん。ジャック、さっきまで寝てたのか？」

「……うん。ミーナと一緒に昼寝しててね。ごめんよ、直ぐ着替えるから……ふあ」

なつ、お前ミイちゃんと一緒に寝てただと……！？

なんてうらやま……けしからんつ。ミイちゃんの寝顔を眺めながら、頭撫でたり柔らかほっぺぶにぶにしたり出来るじゃないか。

あわよくばぎゅつと抱きしめてほお擦りなんてことも——と色々危ない妄想をしていたのがサクラにばれたのか、「じーっ……」っと、えらく不審な目で彼女に見られてた。ジト目である。

……もしかして顔に出てたのか。いかんいかん、口に出さずとも分かっってしまうから、このクセは早急に治さないとな。

こほんつ、と誤魔化すように咳払いしつつ、準備が出来るまで俺たちは近くのソファに腰掛けた。

で、足を組まず腕を組んで座っていた俺の上に、ミイちゃんがちょこんと座ってきた。

どうかしたの、と訊くとミイちゃんはくりと俺に振り向き「ふにやあ」とニコニコ笑顔のまま一言だけ言い、ゆっくりと俺に身体を預けてきた。とりあえず頭を優しく撫でてやると、気持ち良さそうに頭と尻尾をリズムよく左右に揺らした。……ははあ、無意識に甘えてるのか。こうやって静菜さんとかジャックにしてもらってるんだな。超羨ましい。でも今俺超至福。軽く死ねる。遺恨無く成仏できそうだ。とか何とか思ってたら、隣に座っていたサクラが何かぶー言い出した。

「あー、いいなー。……って啓太さん。こないだ私がこーいうことしたら全力で拒否したじゃないですか。この待遇の違いってどうい

うことですかー！」

「この子のは可愛い。お前のはエロい。オーケー？」

「オーケー……ってオーケーじゃだめー！　なら、そのエロいつて理由を教えてくださいよ！　私のは全然エロくないですってー！」

「後ろ向きで膝に座って、首の後ろに手を回して、密着したまま足を腰に絡めて、人の膝で円を描くように尻を動かす座り方の何処かエロくないというのだ。少し貴様是一般常識とやらを勉強してこい」

そして顔つきまでエロくなるから困ったもんよ。明らかに狙ってるだろお前。絶対そっちの雰囲気にもっていかうとしてるだろ。

いつまでも隣でぶーぶー言うサクラを宥めていると、やっと準備が出来たのか、ジャックが部屋から出てきた。うん、今度は決まってる。まだ眠たそうだったけど。

「それじゃ、静ねえのところに行こうか。多分、今は居間にいると思うから」

そう言っただジャックは居間の方へ向かって歩を進めた。俺やサクラもその後を追って居間へと向かった。

もう広さについてどうこう言うのは止めよう。貧乏人に見られるのは嫌だしな。

おそらく俺の部屋の3倍くらいの広さのある居間の中心に、静菜さんはいた。ソファに腰掛けて、ゆったりと読書中だったようだ。静菜さんは俺たちの存在に気付くと「あらあら」と少し慌てて、読

んでいた本を左奥にあった本棚に仕舞い、ぺたぺたとスリッパの音を奏でてこちらにやってきた。

「インターフォンに気付かなくてごめんなさい。せっかく来てくれたのに何のおもてなしも無くて」

「あ、いえいえ。いいですよそんな。無理言つて俺からお邪魔しに来てるんだし」

そう言つて頭をぼりぼり書くと、静菜さんは「すみません」と困つたように笑つて、俺の直ぐ後ろにいるサクラに視線を向けた。

「はじめまして。あなたがサクラさんですか？ 私は宇都宮静菜です。本日はこのようなところへ来て頂いて、ありがとうございます。どうぞごゆっくりくつろいでくださいね」

「あつ、よつよろしくおねがいますつ。私の名前はサクラですつ。あ、じゃ、じゃあゆっくりくつろがせていただきますつ」

ぺこりと頭を下げる静菜さん。それにつられてサクラも慌てて頭を下げて自己紹介した。

そんな様子を見て、静菜さんは控えめにくすくす笑うと、近くにいたミイちゃんを呼んで近くに招いた。

ああ、そついやサクラとミイちゃんはまだお互い知らないもんな。

「それで、この子はジャックの妹のミーナ。サクラさんと同じ猫又の子なんですよ。……ほら、ミイちゃん。挨拶して」

「はじめまして、ミーナです。……あの、ミイって呼んでくださいね」

「あらー。猫耳と尻尾があるからまさかとは思いましたがー……ジヤックの妹さんなんですね。よろしくです、ミイちゃん」

握手の代わりに、彼女の髪を優しく撫でてスキンシップを図るサクラ。

いきなり唐突だなーとか思ってたけど、ミイちゃんはそんなサクラの行為を、くすぐったそうに頬を綻ばせて喜んでいた。

……なんかミイちゃんの笑顔見てたらすごい元気になるな。ロリコンだからじゃなくて。

なんていうか、天使の笑顔だというか。更に猫耳と尻尾と純粹無垢で甘えん坊がドストライクだというか。いや断じてロリコンだからじゃなくて。

とまあ、そう考えていた頃だ。

「ひゃうんっ!？」

突然のミイちゃんの小さな悲鳴に俺の心臓が驚きのあまり「!？」ってなった。一瞬だけ心臓の形が「!？」ってなった。

見てみると、サクラの指が髪の毛でなく、ミイちゃんの猫耳をふにふにしていた。ふにふにふにふに、と、優しく猫耳を揉んでいた。

「ふわー、やつぱり本物は柔らかいですねー。こう、もふもふの毛に柔らかな感触といい、なんともいえぬ気持ちよさです」

「ふあっ……やつ……ふっ……んっ……んっ……! サクラさっ……そんな耳を触っちゃ……あっああんっ! しっぱっ、しっぱ、ぎゅってしないれっ……しびれちゃうう……!」

ほんのりと頬を染めて、我慢しつつも今まで感じたことのない気持

ちよさに声を押し殺せない様子のミイちゃん。

見てられん。いや理性的な意味で。これ以上見て聞いていたら、俺の理性の『理』の字がどっかに飛んでいってしまう。

にしてもミイちゃんの顔が、もう表現するのも規制かかるくらいエツチになつてらっしゃる。俺が歪んでるからそう見えるだけかもしれないが、とにかくエロい。可愛エロい。

俺の心臓の形もいつしか「!？」から「スケベエ……」になつてそうで怖い。いや、なってるだろうな。むしろならない方がおかしい。

「……あー啓太さん。そーいや猫又の耳や尻尾つて、性器と同じくらしいの感度があるってこと、知ってましたー？」

「いやお前が知ってんならやめろよ!? ミイちゃん、立ってられないくらい震えてるじゃないか!」

ばっ! といつまでも触り続けているサクラからミイちゃんを奪う。ミイちゃんは汗びっしょりで俺にしがみついてきて「啓太お兄ちゃん……」とかぐったりしながら言ってた。

身体もふるふると小さく震えていて、猫耳や尻尾も力なくへなへなと垂れ下がっていた。

……やっべ、垂れ耳可愛い。殺人級に可愛い。こんなん見てたらお兄さん無意識に性 お兄さんに変身しそうで怖いですよ。

だけど静菜さんがいる手前。平静を保ちつつ俺はゆっくり息を吐くと、サクラに向けて一喝した。

「……全くもう。人様の猫又様をいじるんじゃない! 可哀想じゃないか!」

「だってえー。自分のやつを自分で触つても、別に気持ちよくもなるともないんですもんー。……だ・か・らあ、今は生憎人間モード

で耳とかないですけどお、人間の性器であるおっぱいとか（自主規制）とかがあ、啓太さんに触って欲しくて待ち焦がれてま」

すばんっ！

「ひにゃああんっ！　けーたさんがあたまぶったああー！　出来ればもう少し強くぶってほしかったー！　だからもう一度お願いしますっ！」

「ドMかおめーは！　ああ、もう！　ここは家じゃねーんだから少しは落ち着きやがれっ！」

こんなに騒いだら流石に怒られるだろ、と思いながら静菜さんを見たが、当の本人はくすくすと笑いながらはこのコントみたいな光景を見ていた。

ジャックはその横でどう反応したらいいのか分からず、黙ってオロオロと事の成り行きを見ていた。

ジャックだらしねえな。オロオロでなくホイホイ言わずぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0393o/>

猫又のサクラ りめいく！

2011年2月14日05時29分発行